

2018年8月2～6日

ヒロシマ、世界大会、平和手記・証言

停滞する核軍縮進展に決意＝国連総長、長崎式典初出席へ



グテレス国連事務総長＝7月15日、サンホセ（AFP時事）

【ニューヨーク時事】グテレス国連事務総長は9日に長崎で行われる原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に国連事務総長として初めて出席するため、7～9日訪日する。グテレス氏は核軍縮に向けた国連の取り組みと決意を被爆者や世界に向けて表明する。核軍縮が停滞し、具体的に進展する展望がない中で、事態打開につなげたい考えだ。

国連では昨年7月に核兵器の使用や保有などを禁止する核兵器禁止条約が採択された。就任以来、核軍縮に熱心に取り組んできたグテレス氏は今年5月に発表した「軍縮アジェンダ」で、「核兵器の全面廃絶は国連にとって最優先の軍縮課題」と明記。こうした中での被爆地訪問は国連側からの働き掛けで実現した。広島市の平和記念式典には2010年に当時の潘基文事務総長が初出席。潘氏は長崎も訪れたが、9日の長崎の式典には出席していなかった。

中満泉国連軍縮担当上級代表（事務次長）は電話取材に「事務総長は（原爆忌の）平和式典が非常に重要な意味を持つことを理解しており、国連の代表としての式典出席が象徴的な意味で非常に意義があることを認識している」と話す。

一方、核軍縮の議論は停滞し、核保有国と非保有国の対立はより顕著になっている。国連本部では20年に5年に1度の核拡散防止条約（NPT）再検討会議が開かれる。既に準備が始まっているが、核保有国と非保有国の対立などから協議の難航が予想されている。

米ミドルベリー国際大学院モントレー校ジェームズ・マーティン不拡散研究センターのエレーナ・ソコバ副所長は、核保有国と非保有国の双方が「意見を言い合うだけでなく、対話にオープンになることが必要だ」と訴える。そのために、包括的核実験禁止条約（CTBT）早期発効をはじめ多くの核軍縮課題の進展へ核保有国が具体的行動を取るべきだと強調。また、核軍縮への意欲を示す必要性も指摘し、核兵器使用のリスク軽減に関する声明などの検討を提言した。（時事通信 2018/08/05-14:49）

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

核兵器のない世界へうねり市民社会の共同さらに



（写真）原水爆禁止2018年世界大会・広島開会総会に全国から参加した人たち＝4日、広島県立総合体育館

原水爆禁止世界大会・広島 開会総会

核兵器禁止条約の発効と、朝鮮半島の非核化を求めるうねりが広がるなかで、原水爆禁止2018年世界大会・広島の開会総会が4日、広島市で開催され、全国各地から5000人（主催者発表）が参加しました。

開会宣言した全労連の小田川義和議長は、核兵器禁止条約と南北・米朝の首脳会談は核兵器のない世界と朝鮮半島の実現にむけた大きなチャンスだと指摘。安倍政権はその流れに力をつけていないと批判しました。「逆流を押し返す力は市民社会の共同のたたかいだ」とのべ、「ヒバクシャ国際署名」、安倍9条改憲阻止の「3000万人署名」の成功を訴えました。

富田宏治国際会議宣言起草委員長（関西学院大学教授）が主催者報告しました。

「総がかり行動実行委員会」の福山真劫（しんごう）共同代表が連帯あいさつし、「日本の平和運動・民主主義運動は分裂の時代から共闘の時代へと確実に新しいステージの上に立っている」と語り、「未来のためにともにがんばろう」とよびかけました。

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の藤森俊希事務局次長があいさつし、広島市の松井一実市長のあいさつを政氏昭夫市民局長が代読しました。

アイルランドの政府代表としてあいさつしたジェイミー・ウォルシュ外務貿易省軍縮不拡散局副局長は、「禁止条約は核兵器全面廃絶に有効な法的枠組みを定めた画期的な文書だ」と語りました。

広島の被爆7団体の代表は、「私たちの核兵器廃絶への思いは広島の猛暑より熱い」と訴え、日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求めました。

「辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議」の山本隆司事務局長が新基地建設撤回にむけた国際連帯と支援を訴えると、大きな拍手に包まれました。

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

原水爆禁止2018年世界大会・広島 あいさつ

4日、広島市で始まった「原水爆禁止2018年世界大会・広島」。開会総会での主催者報告や被爆者のあいさつなどを紹介します。

全労連・小田川さんが開会宣言 共同で逆流押し返そう

世界は、「核兵器のない平和で公正な世界」へ歩みを進めています。一方で、核保有国などの逆流とのせめぎあいも激化しています。核兵器禁止条約と南北・米朝の首脳会談は「核兵器のない世界」と朝鮮半島の実現に大きなチャンス予測させました。安倍政権はその流れや変化に向き合おうとしていません。

国内外の逆流を押し返す力は、市民社会の共同した不屈のたたかい以外ありません。市民社会、各国政府との共同を強めましょう。ヒバクシャ国際署名、安倍9条改憲阻止の署名を広げましょう。安倍政権を退陣に追い込む国民運動を大きくしていきましょう。

富田さんが主催者報告
核兵器廃絶が本流

被爆者を先頭とする市民社会はこの1年間、核兵器禁止条約を力に核兵器の完全廃絶と前進のために、条約を支持する諸国政府と共同し、力を尽くしてきました。

禁止条約発効に向けて、条約を推進する勢力と、反対する勢力とのせめぎ合いは、ますます激しくなっています。しかし、核兵器の完全廃絶を求める流れは、世界の主流であり、後戻りできないものとなっています。

禁止条約を成立に導いた市民社会と諸国政府の共同に力をさらに発展させるならば、必ず前進を切り開くことができます。

広島市長のあいさつ代読 廃絶の思い、次の世代に



(写真) 開会宣言する小田川義和さん



(写真) 報告する富田宏治さん

松井一実広島市長のあいさつを政氏昭夫市民局長が代読しました。

「核兵器が存在し、使用をほのめかす為政者がいる限り、いつ何時、誰が遭遇してもおかしくない。核兵器廃絶を願う切実な思いを世界の人々に広げ、次の世代に伝えていかななくてはならない」と呼びかけました。

「為政者には、核軍縮にむけた誠実な交渉努力はNPT(核不拡散条約)に定められた義務であり、その先にある『核兵器のない世界』は市民社会の願いであること、核兵器禁止条約はそれを具現化したものであると認識してほしい」としています。

日本被団協 藤森さんがあいさつ 世界で自らの体験訴え

私は、73年前の8月6日、生後1年4カ月で被爆しました。その日、私は体調を崩し、母に背負われて広島市牛田の病院に向かっていました。爆音を察知した瞬間、吹き飛ばされました。目と鼻と口だけ出し、包帯でぐるぐる巻きにされ、やがて死ぬとみられていました。その私も病を乗り越え生き延びています。

被爆者は「ふたたび被爆者をつくるな」と国内、世界で自らの体験を訴えてきました。

唯一の戦争被爆国日本の政府は、核兵器禁止条約に反対しています。世界には、核兵器をなくす知恵を持つ人がいます。地球を破壊する核兵器にしがみつ়く人もいます。どちらが人々を生かすか。被爆者は、みなさんとともに核兵器のない世界へ全力をつくします。

総がかり行動実行委 福山さんが連帯あいさつ 共闘が未来ひらく



(写真) 代読する政氏昭夫さん



(写真) あいさつする藤森俊希さん

この演壇に立つとは想像していませんでした。みなさんの熱い思いを感じます。総がかり行動実行委員会は、運動の分裂状態を乗り越え、戦争法案廃案の一点での共闘組織として出発しました。共闘課題を拡大して運動を高揚させ、野党共闘の一翼を担っています。



(写真) 連帯あいさつする
福山真劫さん

平和運動・民主主義運動は、分裂の時代から共闘の時代へと新しいステージに立っています。安倍政権の暴走を止め、核軍縮・被爆者支援・脱原発・憲法9条擁護・沖縄新基地建設阻止、平和・民主主義の時代をつくり出すには、すべての市民・野党が連携・連帯してたたかう必要があります。共同、共闘のなかにこそ未来があります。今回の大会が大きな一歩となると確信します。未来のため、ともに頑張りましょう。

オール沖縄会議 山本さん連帯あいさつ 新基地造らせない

1972年に沖縄が日本に復帰して46年が経過しました。

現在、沖縄島の陸地約18%が在日米軍基地施設で占領されていますが、憲法9条をもつ日本国憲法下に入って以降、沖縄に新しい米軍基地は一つもつくられていません。辺野古新基地がもし建設されれば、9条の下で正式な手続きを経てつくられた最初の米軍基地になってしまいます。

翁長雄志県知事は、埋め立て承認を撤回することを正式に表明しました。翁長知事がいる限り、新基地は絶対につくることはできません。憲法が保障した「地方自治・民主主義・平和」を確立するため、オール沖縄の運動を全力で展開します。全国・国際連帯の支援をお願いします。

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

原水爆禁止2018年世界大会・広島 政府代表あいさつ
アイルランド 核禁止条約は画期的



(写真) 連帯あいさつをする
山本隆司さん

アイルランドは、核兵器が国境を越えて影響を及ぼすことを国際社会は認めるべきだと考えています。わが国の軍縮外交政策は、通常兵器であれ大量破壊兵器であれ、無制限の使用と拡散がいかに人権を侵害し、開発を妨げるかという点を一貫して強調しています。

私たち政府と市民社会はともに、危険な世界の安全保障問題に、恐れではなく大志をもって取り組まねばなりません。互いの不信ではなく、信頼の上に成り立つ世界秩序の構築に決意を新たにしようではありませんか。

核兵器禁止条約は、核兵器全面廃絶に有効な法的枠組みを定めた画期的な文書です。被爆者の力強い証言が世界に与えてきた影響を考えれば、被爆者の役割が条約に言及されているのは当然です。

禁止条約が核兵器不拡散条約(NPT)を損なうものだと意見は誤っています。核兵器の禁止は論理にかなった、かつ道徳的な責務です。

NPTを守る最上の道はそれを履行することです。禁止条約はその履行を可能にするものです。現存する軍縮・不拡散体制にとって、禁止条約は実際的で、補完的なものであり、今それは現実となったのです。

ベネズエラ 完全廃絶が唯一の保証

(非同盟運動を代表しての発言) 非同盟運動は発足以来、核軍縮の先頭に立ち、最優先の課題に位置づけ、核兵器の完全廃絶という目標達成に向けて努力してきました。

非同盟運動は、あらゆる面での核軍縮と核不拡散の進展は、国際の平和と安全を強化するために不可欠であることを強調します。核兵器の完全廃絶は核兵器の使用または威嚇を防ぐ唯一の絶対的保証であると、改めて主張します。

キューバ 調印、批准を求める



(写真) 外務貿易省軍縮不拡散局ジェイミー・ウォルシュ副局長



(写真) セイコー・イシカワ駐日大使

2017年7月7日、世界の圧倒的多数の国は核兵器禁止条約を採択しました。これは核廃絶に向かう基本的な一歩でした。キューバはこの条約を最初に批准した5カ国の一つです。国際社会と声を合わせて、核大国をはじめ禁止条約に調印、



(写真) クラウディオ・モンソン駐日二等書記官

批准していない国にそうするよう求めています。

「核抑止力」という考え方もきっぱり投げ捨てねばなりません。これは核廃絶に寄与するどころか、核兵器の永久保有を促進することになるからです。

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

被爆者の思い熱く 世界大会・広島 開会総会 核兵器禁止条約“国際署名を力に批准迫る”

4日、広島市で開かれた原水爆禁止2018年世界大会・広島の開会総会。「核兵器のない世界に向けて行動を～国内外のたたかい」と題した企画では、海外代表とともに、ヒバクシャ国際署名運動を全国で進める新日本婦人の会や茨城県厚生連労働組合（茨厚労）が次つぎに発言しました。

被爆地・広島からは広島被爆者団体連絡会議（7団体）の代表が登壇。「ヒバクシャ国際署名」を力に、「日本をはじめ各国政府に条約への署名・批准を迫ろう」と呼びかけ



(写真) 海外・国内の核兵器廃絶にむけた取り組みを交流する各団体の代表＝4日、広島県立総合体育館

ました。

被爆者7団体を代表して、広島県原爆被害者団体協議会理事長の佐久間邦彦さん、韓国原爆被害者対策特別委員会副委員長の権俊五(クォン・ジュノ)さん、広島県朝鮮人被爆者協議会理事長の金鎮湖(キム・チノ)さんが訴えました。

被爆者7団体の吉岡幸雄事務局長からのメッセージを佐久間さんが代読しました。各国で、核兵器禁止条約の発効

へ向けた取り組みが進んでいると指摘。その上で、日本政府は「国民多数の願いに背を向け、核兵器保有国とともに条約に反対している」と批判しました。

広島市の被爆者団体の総意として6日に、「核兵器禁止条約へ署名し、批准への努力」を安倍首相に要求すると表明し、「こうした政府の態度を変えさせ、変えない場合は政権から退ける」とのべています。

金さんは、広島は例年より猛暑だが、「私たちの、核兵器廃絶への思いのほうに熱い」と訴え。朝鮮半島の非核化に向けて大きな流れができているもとの、「一日も早く実現してほしい。そのために、署名に一人でも多く参加してほしい」。

権さんは、日米両政府は朝鮮人被爆者の数を矮小(わいしょう)化しようとしていると指摘。「被爆者は、どこにいても被爆者です。無残な核兵器をなくすために、ともに手を携えていきたい」とのべました。

舞台いっぱい横断幕を掲げて登壇した新日本婦人の会の女性たち。埼玉県浦和支部の森田薫さんは、「被爆者や戦争体験者の証言を聞くつどいが力になり、署名集めが進んでいます」と発言。「一人ひとりと対話することが、核兵器のない平和な世界をつくる一歩になると実感しています」

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

国際会議 平和の流れ・禁止条約・9条守れ 労組・女性団体が決意

原水爆禁止世界大会国際会議（2～3日）では、日本の労組や女性団体から発言がありました。

日本婦人団体連合会（婦団連）の柴田真佐子会長は、国際民主婦人連盟執行委員団体として、核兵器禁止条約参加とヒバクシャ国際署名の取り組みを呼びかけてきたと紹介。朝鮮半島の非核・平和の動きを後押しするため日本政府に対し、『慰安婦』問題の解決を含む植民地支配の清算など日朝間の諸懸案を包括的に解決し、国交正常化に努力し、非核化に積極的に関与すべきです」と述べました。

新日本婦人の会中央常任委員の河村玲子さんは、核兵器禁止条約に続いて米朝首脳会談が実現し、非核・平和の世界・北東アジアへの希望を開く情勢を確信にしようと強調。安倍政権に9条改憲反対やセクハラのない社会を迫る運動を広げていると紹介し、「あらゆる運動を結集して一日も早く安倍政権を退陣させ、命を大切に政治を実現させるときです」と述べました。

全労連の長尾ゆり副議長は、「核兵器禁止条約と憲法9条にこそ世界と日本の平和の希望があり、被爆者の深い願いが込められています」と指摘。ヒバクシャ国際署名と安倍9条改憲阻止3000万人署名は、安倍政権を倒して非核・平和の政府を実現する力になると述べ、「核兵器も戦争もない社会を子どもたちに手渡したい」と述べました。

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

2018
国民
平和大
行進
歌や拍
手集
結集会
広島



(写真) 国民平和行進の集結集会であいさつする通し行進者たちは4日、広島市の平和記念公園

2018年
原水爆
禁止国
民平和

大行進(東京—広島コース)は4日、広島市の平和公園で集結集会を開きました。気温34度。青や緑など色とりどりののぼりをたなびかせて500人が行進を歌や拍手で出迎えました。

全国商工団体連合会の太田義郎会長は、核兵器禁止条約採択や米朝首脳会談など「核兵器のない世界」と朝鮮半島の非核化に向け前進したと語り、「日本が核兵器禁止条約に賛成するよう大いに声をあげていこう」とあいさつしました。

西日本豪雨災害の影響などで「東京—広島コース」の平和行進の短縮や中止も余儀なくされましたが、広島に到着した8人の通し行進者が腕を真っ黒にして「原発再稼働反対と活動する人の頑張りが励ましになった」「長野県で原水禁の人たちと一緒に歩いた」などと紹介しました。

初めて参加した男性(24)は「ここまで大々的に行えば、無関心の人にも好印象を持ってもらえると思います。とてもいい運動ですね」と話しました。

広島市の松井一実市長や永田雅紀市議会議長からメッセージが寄せられました。

しんぶん赤旗 2018年8月5日(日)

多様で壮大な行動を 国際会議が「宣言」採択

広島市で開かれた原水爆禁止2018年世界大会・国際会議は4日、閉会総会を開き、ヒバクシャ国際署名など「核兵器のない世界」を求める多様で壮大な行動を各国で発展させ、国際的共同を呼びかける「国際会議宣言」を採択し、閉幕しました。

宣言は、核兵器の完全廃絶を求める流れが「世界の主流」であり、「核兵器禁止条約の発効も押しとどめることはできない」と指摘。朝鮮半島の非核化と平和体制の確立に向けた動きを「心から歓迎」し、関係各国が「誠実に交渉し、合意を履行」するよう求めました。

日本政府に対して、禁止条約参加と米軍新基地建設の撤回、憲法9条を守り生かした外交を求めています。

「被爆者を先頭とする市民社会が、被爆の実相を広げながら核兵器廃絶の緊急性を訴えていくことが重要」だと強調。各国政府に禁止条約への参加を求め、「一刻も早く発効」させるとともに、朝鮮半島を非核化し、北東アジアに平和体制を確立しようと訴えています。

しんぶん赤旗 2018年8月3日(金)

核兵器禁止条約の発効へ 原水爆禁止世界大会国際会議始まる 朝鮮半島非核化 世論で前進を

原水爆禁止2018年世界大会・国際会議が2日、広島市で始まりました。歴史的な核兵器禁止条約の採択から1年。条約発効と、朝鮮半島の非核化の実現にむけて各国の世論と運動をどう前進させるかを交流します。

主催者あいさつした世界大会実行委員会の野口邦和

運営委員会共同代表は、「核兵器のない平和で公正な世界のために着実に歩みをすすめた」とのべ、一日も早い発効を求めていくと語りました。

朝鮮半島の非核化などの実現にむけて、「関係各国と国際社会の協力が重要だ」と指摘。安倍政権に「核の傘」依存の見直しと、条約への署名と批准を迫ろうと訴えました。

日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)の大江克典事務局次長はあいさつで、条約に背を向ける日本政府に対して「核の傘を理由に反対するとは何たることか」と批判。参加者に「ヒバクシャ国際署名をうずたかく積み上げよう」と呼びかけました。

第1セッション「核兵器の非人道性、ヒバクシャのたたかい」では、広島・福島生協病院の藤原秀文理事長、広島県被団協の吉岡幸雄副理事長、韓国被爆者協会の金成云(キム・ソンウン)さんらが発言。「被爆者は生き地獄が今なおフラッシュバックする。被爆者の苦しみの一つだ」(藤原氏)と告発しました。

第2セッション「核兵器禁止・廃絶と市民・運動の役割、核兵器禁止条約の推進」では、原水爆禁止日本協議会(日本原水協)の安井正和事務局長、米、英、仏、韓の各国市民の代表が「この問題は国際的に解決しなければならない。



(写真) 原水爆禁止2018年世界大会国際会議の開会総会=2日、広島市中区

団結して立ち向かおう」(英・核軍縮運動〈CND〉レイチェル・メリー氏)と討論。日本共産党の緒方靖夫副委員長(世界大会議長団)が発言しました(要旨)。

広島で原水禁大会、開幕 核兵器禁止条約反対の政府を批判

共同通信 2018/8/4 19:35

原水爆禁止日本協議会(原水協)系と原水爆禁止日本国民会議(原水禁)系の広島大会が4日、それぞれ広島市で始まった。いずれの大会でも国連で採択された核兵器禁止条約に反対の立場を取る日本政府への批判が相次いだ。両大会とも6日まで開かれる。

原水協系の大会では、日本原水爆被害者団体協議会の藤森俊希事務局次長(74)が「世界には核兵器をなくす知恵を持つ人もいれば、核兵器にしがみつく人もいる。被害者は核兵器のない世界へ全力を尽くすことを表明する」とあいさつした。

原水禁系の大会では、長年、証言活動に取り組む広島市の桑原千代子さん(86)が被爆した体験を語った。

原水禁と原水協の世界大会、広島市で開幕

読売新聞 2018年08月04日 20時50分

原水爆禁止日本国民会議(原水禁)などが主催する「被爆73周年原水爆禁止世界大会・広島大会」が4日、広島市で始まった。国内外の平和団体や被害者など約2200人(主催者発表)が参加。桑原千代子さん(86)(広島市南区)が被爆体験を証言した。

原水爆禁止日本協議会(原水協)などが主催する「原水爆禁止2018年世界大会・広島」も4日、広島市で開幕。約5000人(主催者発表)が参加し、世界各国が核兵器禁止条約を批准するよう求めた。

両大会とも6日まで分科会などが開かれる。

広島 原水協国際会議 日本に核兵器禁止条約へ参加求める

毎日新聞 2018年8月4日 11時51分(最終更新 8月4日 12時24分)

広島市で開かれていた原水爆禁止日本協議会(原水協)による原水爆禁止世界大会の国際会議は4日、日本をはじめ各国に核兵器禁止条約への参加などを求める宣言を採択して閉幕した。

各国の政府関係者や平和運動に取り組む市民ら約200人(主催者発表)が参加し、3日間の日程で核抑止論や原発ゼロなどをテーマに議論した。宣言では、朝鮮半島の非核化と北東アジアの平和確立、核兵器のない世界の実現や軍事費の大幅削減なども訴えた。【小西雄介】

原水禁世界大会 開会総会に2200人 広島

毎日新聞 2018年8月5日 00時11分(最終更新 8月5日 00時11分)

原水爆禁止日本国民会議(原水禁)などによる「原水爆禁止世界大会・広島大会」が4日、広島市内で始まり、開会総会に約2200人(主催者発表)が参加した。6日まで核兵器廃絶や脱原発をめぐる意見を交わす。

総会では、参加者全員で原爆と西日本豪雨の犠牲者に黙とうし、佐古正明副実行委員長が「日本は核兵器禁止条約に即座に批准し、先頭に立って核保有国を説得するべきだ」とあいさつ。被害者の桑原千代子さん(86)が「平和の原点は思いやり。多くの人の犠牲の上に成り立った平和を私たちが守っていかねばなりません」と訴えた。高校生によるスピーチや、東京電力福島第1原発事故の被災地からの報告もあった。【関雄輔】

「平和の教科書に」と復刊＝被害者の故谷口さん描いた本



復刊された「ナガサキの郵便配達」を手に持つ斎藤芳弘さん(左)と、イザベル・タウンゼントさん＝2日午後、東京都千代田区

戦後の核兵器廃絶運動をリードした故谷口稜暉さんの体験を通じ核兵器の悲惨さを描いたノンフィクション「ナガサキの郵便配達」が、長崎に原爆が投下された9日に復刊される。英国人著者の長女らが2日に東京都内で記者会見し、「平和の教科書として読んでほしい」と呼び掛けた。

谷口さんは16歳の時、長崎市内で郵便配達中に被爆。背中一面を焼かれて生死の境をさまよった。日本原水爆被害者団体協議会の代表委員を務め、昨年88歳で亡くなった。

著者の故ピーター・タウンゼントさんは英空軍の元パイロットで、退役後にジャーナリストへ転身。谷口さんらへの取材を基に1984年に同書(原題ザ・ポストマン・オブ・ナガサキ)を出版した。邦訳も出たが、絶版となっていた。

会見した長女のイザベルさん(57)は「父がこの場にいたら誇りに思うだろう。若い人たちに読んでもらいたい」と話した。復刊プロジェクト代表の斎藤芳弘さん(71)によると、読者の寄付によって出版を重ねていく予定という。(時事通信 2018/08/02-21:02)

しんぶん赤旗 2018年8月6日(月)

自分にできることは 高校生平和集会 学び語り交流

「核兵器と戦争のない21世紀を〜学び語り交流しよう」を合言葉に、全国高校生平和集会



(写真) 被爆当時の状況を語る江種さん＝5日、広島市内

(主催・実行委員会)が5日、広島市内で開かれました。45回を迎える今回は、各地から160人の高校生と教職員が参加しました。

開会全体会では、被爆教職員の会会長の江種祐司さん(90)が、17歳のとき、広島師範学校本科(現・広島大学教育学部)1年で被爆した状況を写真や地図も使って生々しく話しました。

広島高校生平和ゼミナール実行委員会の代表が基調報告し、戦争の悲惨さ、被爆者の思いと祈りを受け継ぐと表明。核兵器禁止条約と米朝首脳会談など朝鮮半島非核化の流れを紹介し、「国際情報も自分と関係のないこととしてとらえず、自分たちにできることは何なのかを考えよう」と呼びかけました。

特別報告では、沖縄県から参加した高校2年生が、大浦湾を米軍基地にするなど活動していると語りました。高知県の幡多ゼミナールの代表は、ビキノと長崎で二重被ばくした元乗組員への聞き取り活動と、DVD「核被災と核兵器禁止条約」を紹介しました。

各地の高校生が次々にマイクを握りました。東京高校生平和ゼミナールの代表は、「ヒバクシャ国際署名に力を入れています。若者の聖地・原宿で100人から署名をもらうまで帰らないとの企画ですすめている」と話しました。

しんぶん赤旗 2018年8月6日(月)

被爆の実相学びあう 世界大会分科会 青年のひろば

原水爆禁止2018年世界大会の分科会「青年のひろば」には約



(写真) 被爆体験をきいて感想を出し合う青年たち＝5日、広島市内

450人の青年が参加しました。(1)被爆者訪問企画(2)聞き取り企画(3)追体験企画の三つに分かれ、被爆の実相と核兵器廃絶の意味を学びました。

聞き取り企画では冒頭、被爆者医療に長年携わっている齋藤紀(おさむ)医師が講演しました。

宮城県原爆被害者の会(はぎの会)の木村緋紗子事務局長(81)が広島の爆心地から1.6キロの地点の祖父の家で被爆した体験を語りました。

盆栽の手入れをしていた祖父は熱線で体が焼けただけ、「祖父の体は『赤鬼』みたいに膨れ上がり、うじがわきました。8歳だった私はうじをピンセットで取るのが仕事でした。それが嫌でしたが、今は後悔しています。今後このようなことをみなさんにさせたくない」と語りました。

青年たちは木村さんの話に食い入るように聞き入りました。

その後グループに分かれ交流しました。千葉県や栃木県などの参加者のグループは、愛知県原水爆被災者の会(愛友会)の事務局長で、5歳の時、広島の爆心地から1.2キロの地点で被爆した水野秋恵(ときえ)さんを囲んで体験を聞きました。

午後もグループトークが続き、感想や意見を出しあいました。「水野さんの話は頭のなかで映像化されるくらい、どれだけ悲惨だったか想像できた」(男子学生)、「被爆者の『同じ思いをさせたくない』という思いを実現するためには核兵器を廃絶するしかない」(中学生の男子生徒)などの声がありました。

「日本は被爆国として真っ先に核兵器禁止条約に署名・批准すべきだった」という女性(22)は「安倍首相は条約を批准しないと明言している中での式典への出席ですが、どういう空気になるのかなと思います」と話していました。

しんぶん赤旗 2018年8月6日(月)

被爆体験伝承へ 日・英・米・仏・韓の青年が交流 広がれ平和の“輪” リング・リンク・ゼロ

広島市で開かれている原水爆禁止2018年世界大会の関連行事・「Ring! Link! Zero(リング・リンク・ゼロ)2018年in HIROSHIMA」が4日夜、開かれました。世界大会に参加する青年たちが被

爆体験を聞きとり、世界や日本の核兵器廃絶運動を学び交流しました。600人が参加しました。

5歳の時に広島市の爆心地から13キロ地点で被爆した大越和郎さん(78)が証言。「黒い雨」にうたれ真っ黒になった人たちが家の庭にどんどん入って来る光景と、祖母やおじが次つぎに亡くなっていく様子を語りました。「被爆者は生きているうちに核兵器のない世界が実現することを夢見ています」と述べ、「ヒバクシャ国際署名」を一緒に取り組もう

と呼びかけると、大きな拍手が送られました。

世界と日本の運動交流では和歌

山県の青年やイギリス、アメリカ、フランスの海外代表が登壇しました。

民青同盟員らが『ピースカフェ』を開き、高校生や若い労働者に呼びかけて被爆体験を聞いた(神奈川)「核兵器が使われないように廃絶の発信者になりたい」(千葉)と活動交流や今後の決意を語りました。

韓国の李俊揆(イ・ジュンキュ)さんは日本語で、朴槿恵(パク・クネ)前大統領の罷免を求めて数百万人単位で国民が立ち上がった「ろうそく革命」について述べました。

参加者の青年が「韓国では若者がどんな思いでデモに参加したのか」と質問すると、李さんは「歴史を作りたいという思いが国民の間に広がっていた」と述べました。

閉会あいさつをした民青の鈴木平人常任委員が行動提起し、被爆の実相と核兵器の非人道性、学んだことを周りの青年に伝え、「ヒバクシャ国際署名」に力を合わせようと呼びかけました。

しんぶん赤旗 2018年8月6日(月)

原水爆禁止世界大会・広島 多彩なテーマで交流 立ち上がる人々

原水爆禁止2018年世界大会・広島は5日、広島市内各地でフォーラム、特別集会、分科会などをおこない、核兵器廃絶にむけて多彩なテーマで学び、交流しました。

核保有国に行動迫る 政府代表とNGOの対話



(写真) アメリカの青年(正面)の発言に耳を傾ける青年ら=4日、広島市

フォーラム「核兵器禁止・廃絶へ、政府とNGOの対話」は、二人の政府代表らをパネリス

トに迎え、海外代表を含む150人が対話や経験交流をすすめました。

オーストリア欧州統合外務省軍縮軍備管理不拡散局長のトーマス・ハイノッチさんは、核兵器禁止条約の採択から1年で、60カ国が署名、14カ国が批准していることについて、「核軍縮に関わるこれまでの諸条約よりもハイペースで順調に進んでいる」と指摘。「50カ国が批准し、発効につながると信じている」と述べました。

アイルランド外務貿易省軍縮不拡散局副局長のジェイミー・ウォルシュさんは、核不拡散条約(NPT)の歴史を振り返り、「核軍縮のための交渉過程で、保有国はいろんなことを言うてくるだろうが、あきらめてはいけない」と指摘しました。

アメリカフレンズ奉仕委員会理事・軍備管理協会スタッフのアリシア・サンダーズ・ザクレさんは、核戦略をはじめとするトランプ米政権の危険な政策に対し「世界を良くしようと若い人たちが声を上げている」と指摘。原水爆禁止日本協議会(日本原水協)代表理事の高草木博さんは、核保有国に核軍縮の義務を履行させるのは世論の力であり、世界的な協力が不可欠だと強調しました。

米国でも運動驚いた新基地ノ一沖縄と連帯

特別集会「核と基地の

ない日本、沖縄との連帯を」では、「辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議」や海外代表が米軍基地建設とのたたかいについて報告。沖縄・名護市辺野古への新基地建設を



(写真) 核兵器禁止・廃絶へ話し合う「政府とNGOの対話」フォーラムの参加者=5日、広島市中区



(写真) 核と基地のない日本、沖縄との連帯を話し合う特別集会=5日、広島市南区

必ず阻止しようと語りあいました。

集会の趣旨説明を日本平和委員会事務局長の千坂純さんが行いました。

「オール沖縄会議」事務局長の山本隆司さんが報告。「日本国憲法下で、沖縄に米軍基地がつけられたことはありません。軟弱地盤などの問題もあり、辺野古に基地は絶対完成できません」と語りました。

米国の平和・軍縮・共通安全保障キャンペーンのジェラルド・ロスさんは、軍事的な威嚇をくりかえす米トランプ政権とのたたかいを紹介し、同時に「米国でも、沖縄の米軍基地建設に反対するたたかいがおこっています」と紹介しました。

香川県高松市の高校教員（28）は「沖縄の人が基地建設に反対し続ける理由がよく分かりました。米国でも沖縄の基地建設に反対して運動をしている人たちがいることを知り驚きました」と話していました。

非核化

悲願
熱い関心
朝鮮半島とアジア・日本

特別集会
「非核平和の朝鮮半島とアジア



(写真) 非核平和の朝鮮半島とアジアについて意見を交わす特別集会参加者=5日、広島市中区

島とアジア—日本の役割」の会場は、立ち見が出るほどの参加者の熱気にあふれ、各国から参加したパネリスト4氏らが討論しました。

米国の平和・軍縮・共通安全保障キャンペーン議長のジョゼフ・ガーソンさんは、米政権に対して、非核化にむけた行程表の策定を求めるなどの運動を報告。韓国の全国民主労働組合総連盟の朴錫民（パク・ソクミン）さんは、「世界の非核化は人類の悲願であり、朝鮮半島の非核化はその出発点になる」と指摘し、「団結とたたかいで朝鮮半島、北東アジアの平和を勝ち取ろう」と呼びかけました。

中国・社会科学院のチェン・ジェさんは、中国でも南北・米朝首脳会談は高く評価されていると紹介。原水爆禁止日本協議会（日本原水協）常任理事の川田忠明さんは、朝鮮半島の非核化にむけて「核兵器はいかなる理由によっても使用されてはならない」という世論を圧倒的に広げることが重要だと強調。日本が「核の傘」から離脱し、核兵器禁止条約を批准することは、朝鮮半島の非核化を前進させる力になると語りました。

フロア発言で、秋田の代表は、朝鮮半島の非核・平和の

流れに逆行する陸上配備型イージス反対の行動を報告しました。

ライブハウスで訴え
草の根の行動
平和求めて

「核兵器のない平和で公

正な世界へ—草の根の行動」をテーマにした分科会には、120人が参加しました。

広島県原水爆被害者団体協議会理事長の佐久間邦彦さんは、「ヒバクシャ国際署名」について、街頭だけでなく、ライブハウスで音楽と被爆証言と署名をセットで訴えた体験を話しながら、「これまでにつながっていない人たちにどう広がっていくか工夫が大事だ」と語りました。

平和・軍縮・共通安全保障キャンペーンのジェラルド・ロスさんは、アメリカ国内で核軍縮に向けたピースアクションや、署名活動、議員への働きかけを行っていることを紹介しました。

「黒人の命も大事だ」と活動しているカーリーン・グリフィス・セクターさんは、アメリカでの黒人差別の現状について語り、「さまざまな問題の根本には、暮らしに使われるべき予算が軍備に使われているという現実がある。それを変えるためには、連帯する必要がある」と語りました。

核兵器禁止条約に関するミニ講座と題した国際会議宣言起草委員長、富田宏治さんの報告がありました。

政権の
言い分
通らぬ
9条改憲
阻止
一体に
推進

分科会「9条改憲ストップと核兵器禁止・廃絶」

には初参加の人が多く、安倍9条改憲阻止の「3000万人署名」や「ヒバクシャ国際署名」をめぐる共同の広がり进行交流しました。

東京慈恵会医科大学教授の小沢隆一さんが講演し、「9条改憲阻止、東アジアの平和・軍事同盟体制の打破、核兵器廃絶は一体の課題だ」と語りました。



(写真) 発言に拍手を送る参加者=5日、広島市内



(写真) 「9条改憲ストップと核兵器廃絶を一体に進めよう」と交流した分科会=5日、広島市中区

埼玉県労働組合連合会（埼労連）の代表は「オール埼玉総行動」を県弁護士会、埼労連、連合埼玉が後援してきたと紹介し、「核兵器を廃絶し、憲法を守る共同をさらに前進させたい」と報告しました。

大阪・西淀川原水協の代表は、区民過半数5万人を目標にヒバクシャ署名の取り組みを報告。「禁止条約の意義を広げ、運動・世論を広げていこう」と語りました。

秋田で陸上配備型イージス計画に反対する団体などをつくる連絡会の参加者は、地元住民や保守層からも反対の声が広がっていると紹介し、「非核化は住民にとって切実な課題。朝鮮半島の変化で配備する政府のいい分は通らなくなっている」と強調しました。

ジャーナリズムの役割は

核兵器のない世界に向けてジャーナリズムの役割を語る分科会が初めて行われました。

元日本テレビ記者で日本ジャーナリスト会議代表委員の隅井孝雄さんが講演。ビキニ環礁での核実験で第五福竜丸に加えて992隻の漁船が被ばくしていた事実を、南海放送などのメディアが市民の調査と連動して報道したことを指摘。「メディアと市民運動が合致すれば大きな力を発揮する。今でもメディアの調査報道は重要だ」と語りました。

会場からは、「市民運動があまりメディアでとりあげられない」「政府を批判するコメンテーターなどへの圧力があるのではないか」などの意見が出されました。

隅井さんは、政府・与党が報道をチェックしていることや、「政府批判はけしからん」という電話が集中的に寄せられる実態もあると話し、「いい報道だと感じたら手紙やメールで番組を励ますことも重要だ」と語りました。

しんぶん赤旗 2018年8月6日(月)

原水禁が広島大会

原水爆禁止国民会議（原水禁）などをつくる実行委員会主催の被爆73周年原水爆禁止世界大会・広島大会が4日、広島市であり、2200人（主催者発表）が参加しました。

あいさつした佐古正明・副実行委員長（原水禁副議長）は、南北・米朝首脳会談で「安倍政権の軍事力・圧力一辺倒の政策が破たんした」と強調。「アメリカの核の脅しで平

和は実現できない」と述べ、核兵器禁止条約の署名・批准を求める運動を訴えました。

藤本泰成事務局長（原水禁事務局長）は基調報告で、禁止条約について「被爆国政府として日本が署名・批准するのは当然だ」と指摘。「核も戦争もない21世紀を実現しよう」と呼びかけました。

広島で被爆した桑原千代子さんが体験を語り、「平和を自らの手でつかむため、わずかでもできることをやってほしい」と訴え。高校生平和大使の代表が決意表明しました。

オバマ氏抱擁の被爆者「平和のため生涯懸けた」＝米兵遺族に最期伝える



被爆死した米兵捕虜の研究を続けてきた、被爆者の歴史研究者森重昭さん＝7月26日、広島市西区

広島は、6日に73回目の原爆忌を迎える。投下された原爆は、多くの市民と共に外国人の命をも奪った。被爆死した米兵捕虜の実態を明らかにした広島市の歴史研究者森重昭さん（81）は「遺族が故人のことを知りたいのは日本人も米国人も一緒。少しでも平和の役に立てばと全生涯を懸けた」と40年にわたる研究生活を振り返った。

森さんは8歳の時、爆心地から約2.5キロの地点で被爆した。通っていた済美国民学校では、校舎にいた児童らが全員犠牲になったが、転校していたため生き残った。戦後、校長の手記を読み、敷地内で米兵捕虜の遺体が見つかったと知ったことが、研究を始めたきっかけだ。

資料収集や聞き取りで、12人の捕虜を特定。同じ姓の人に、拙い英語で片っ端から国際電話をかけ、遺族を探し当てた。米国政府は「戦闘中行方不明になった」としか説明しておらず、詳しい死亡場所や状況を伝えると、「敵国なのによく調べてくれた」と感謝された。

「金目的か」と怪しまれることもあったが、手紙のやりとりを重ね信用を得たという。その後も、他の外国人被爆者の研究を続けた。

2016年5月のオバマ米大統領（当時）の広島訪問では、米側が森さんを式典に招待。涙を流す森さんをオバマ氏が抱き締める様子は、世界に報道された。

森さんは今年5月、念願の初訪米を果たし、ニューヨークの国連本部やサンフランシスコで開かれた、自身のドキュメンタリー映画の上映会に出席した。「観客は全員スタンディングオベーション。日本よりもすごい反響で感激した」

滞在中、ケネディ元大統領に関する資料が集まる「ケネディ・ライブラリー」も訪問。世界を核戦争の淵に立たせ

たキューバ危機後、中南米を中心に非核兵器地帯を設けたように、「東アジア全体から核を永久に除去する条約を関係国が結ぶべきだ」と訴える。

森さんは、6月の米朝首脳会談を高く評価し、「(非核化が) 案外うまくいくチャンスが訪れるかもしれない」と期待した。「今後は、長崎で被爆したオランダ人捕虜を調査し、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館への遺影登録を進めたい」と意欲を燃やしている。(時事通信 2018/08/04-14:35)

帰国被爆者の多くが死亡＝「人道支援を」－北朝鮮団体

広島や長崎で被爆し北朝鮮に帰国した人のうち、この10年間に消息が判明した111人中、51人が亡くなっていたことが分かった。原水爆禁止日本国民会議(原水禁)などは、医療支援の充実を求める要望書を8月中旬に厚生労働省に提出する。

広島県原水禁の金子哲夫代表委員(70)が7月に訪朝し、朝鮮被爆者協会から調査の中間報告を受けた。調査は3回目で、2008年時点で生存していた被爆者382人を対象に実施。18年1～5月に消息をつかめた111人のうち、生存者は60人だった。

広島県朝鮮人被爆者協会の金鎮湖理事長(72)は「北朝鮮の医療機関の水準は日本に比べればずいぶん落ち、死亡率は日本に比べ高い」と説明。医薬品の提供や病院建設など早期の支援を求めた。

被爆者援護法は在外被爆者にも医療費の支給を認め、医療支援も行っているが、国交がない北朝鮮に居住する被爆者への援護は事実上困難となっている。金子氏は「日本政府は、人道的な立場に立った具体的な施策を積極的に展開することが必要だ」と訴えた。

広島市によると、原爆投下時、戦時中の労働不足を補うため強制的に連行されるなどして市内にいた朝鮮人は数万人とされる。(時事通信 2018/08/05-15:24)

「平和の価値を次世代に」＝韓国人被爆者の慰霊祭－広島



韓国人原爆犠牲者の慰霊碑に献花する在日韓国人の女性たち＝5日午前、広島市中区の平和記念公園

広島で原爆の犠牲になった韓国人の慰霊祭が5日、広島市中区の平和記念公園で開かれた。主催した在日本大韓民国民団広島県地方本部の李英俊団長は追悼の辞で、「被爆で大変な人生を強いられた被爆者の悔しさを私たちは覚えて

いる。惨事が二度と起こらぬよう平和の価値を次世代に伝える」と述べた。

慰霊祭は今年で49回目で、この1年間に亡くなった12人を加えた計2746人の死没者名簿が、韓国人原爆犠牲者慰霊碑に納められた。出席した駐広島韓国総領事館の金宣杓総領事は「韓半島(朝鮮半島)で核をなくし、戦争の可能性を消し去る努力が芽生えつつある。分断された同族が再会する日が来るよう、加護を仰ぐ」と慰霊碑に願った。

遺族ら約300人が参列。献花をしたほか、民族衣装を着た被爆2世の女性らが慰霊歌を歌った。(時事通信 2018/08/05-15:22)

韓国人被爆者 2746 人を追悼 広島で慰霊祭

共同通信 2018/8/5 16:50

強制連行などで日本に渡り、広島への原爆投下で亡くなった韓国人を悼む慰霊祭が5日、広島市中区の平和記念公園にある「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」の前で営まれ、1年間で新たに亡くなった12人を加えた2746人の死没者名簿を奉納した。



韓国人被爆者の慰霊祭で、黙とうする人たち＝5日、広島市の平和記念公園

韓国人被爆者や遺族ら約300人が参列。チマ・チョゴリ姿の女性らが慰霊の歌をささげ、犠牲者を悼んで黙とうし、慰霊碑の前に献花した。

韓国から訪れた韓国原爆被害者協会の李圭烈会長(73)は広島で被爆した。「原爆が落ちた日のことを忘れてはならない。韓国から非核化を求めて声を上げ続ける」と話した。

慰霊碑は1970年に建立された。

広島 韓国人原爆慰霊祭 在日韓国人ら300人が追悼

毎日新聞 2018年8月5日 19時16分(最終更新 8月5日 19時58分)



韓国人原爆犠牲者慰霊碑の前で慰霊歌を歌う人たち＝広島市中区の平和記念公園で2018年8月5日午前10時24分、山崎一輝撮影

広島原爆の日（6日）を前に、広島市中区の平和記念公園にある韓国人原爆犠牲者慰霊碑前で5日、慰霊祭が開かれた。在日韓国人ら約300人が参列し、チマ・チョゴリ姿の女性が慰霊の歌をささげ、犠牲者を追悼した。

在日本大韓国民団広島県地方本部の主催で、新たに亡くなった12人の被爆者を加えた計2746人の死没者名簿を奉納した。金宣杓（キムソンピョ）駐広島韓国総領事は、追悼のあいさつで4月の南北首脳会談などを念頭に北朝鮮情勢に触れ、「核兵器をなくし、戦争の可能性を消し去るための努力が芽生えつつある」と述べた。

参列した広島市西区の金江南出（なんしゅつ）さん（89）は原爆で家族3人を失い、自身も被爆した。「何年たっても悲しみは変わらない。当時を知る仲間が減っていくのがさみしい」と語った。

広島では、3万人前後の朝鮮半島出身者が被爆したとされる。【関雄輔】

「核の悲惨伝える責任」＝反原発訴訟原告の被爆者一妹の死が転機に



伊方原発訴訟について話す原告団長の堀江壮さん（左）と副団長の伊藤正雄さん＝3日午後、広島市中区

広島地裁では、四国電力伊方原発（愛媛県）再稼働差し止め訴訟の審理が続いている。原告のうち42人は広島、長崎の被爆者だ。原告団長の堀江壮さん（77）＝広島市＝と副団長の伊藤正雄さん（77）＝同＝は「核の後遺症はいつまでも残る」と語り、悲惨さを知る被爆者が行動することは「将来への責任」と訴える。

73年前、堀江さんは爆心地から約3キロの場所で被爆。母と姉、兄はいずれもがんで死去した。爆心地にいた伊藤さんの兄は全身を大やけどして亡くなり、姉は遺骨すら見つからなかった。4歳だった堀江さんと伊藤さんの記憶には、おびただしい数の遺体を茶毘（だび）に付す臭いが焼

き付いている。

「原発はやめるべきだ」。伊藤さんが反原発運動に本腰を入れるようになったのは、東京電力福島第1原発事故が起きた直後の2011年3月15日に、1歳年下の妹が亡くなってから。「両親や兄、姉より妹の時のほうがショックだった」と振り返る。

妹は甲状腺障害があり、息子も甲状腺の手術を受けたことを、「自分が被爆者だからがんが出たんでなかろうか」と死の間際まで気に掛けていた。伊藤さんは、核の平和利用をうたう原発を肯定していたが、妹の死で考えを変えたという。

12年度に広島市が始めた『伝承者』としても活動。平和記念資料館やバーで幅広い世代に、自身と12歳で被爆した「原爆乙女」の松原美代子さんの体験を紹介。手製の折り鶴を渡し、「私たちのような悲惨な体験を誰にもしてほしくない。同じ過ちを繰り返さないため忘れてはいけない」と語り掛ける。

広島高裁は17年12月、訴訟と別の仮処分申請で、伊方3号機の運転差し止めを命じた。四国電は異議を申し立て、審理は継続中。堀江さんは「後の世代のためにやっとなきゃ。何もやらなかったらまずい。いや応なしに負の遺産を背負わせている」と語った。（時事通信2018/08/05-15:00）

広島 「被爆電車」で85歳が証言「言葉で表せぬ恐怖」
毎日新聞2018年8月4日11時36分(最終更新8月4日13時55分)



被爆電車の車内で被爆体験を話す朴南珠さん（左から2人目）＝広島市で2018年8月4日午前10時半、山崎一輝撮影

73年前の原爆投下時に壊れ、修理されて今も運行を続ける広島電鉄の「被爆電車」の車内で4日、被爆証言を聞く学習会があった。在日韓国人被爆者の朴南珠（パク・ナムジュ）さん（85）＝広島市西区＝が、被爆直後の広島の様子を説明し、小中学生や保護者ら約40人に「広島が一瞬でなくなった。言葉で言い表せないぐらいの恐怖だった。原爆は本当に残酷だ」と語りかけた。

朴さんは女学校1年だった1945年8月6日、爆心地から約1.8キロ地点を走っていた電車の中で被爆。電車

は大破し、割れた部品が頭に突き刺さった。血まみれで近くの川の土手に逃げると、皮膚がどろりと垂れ下がった腕を上下に動かしながら進む人を大勢見たという。

広島電鉄は被爆当日だけで、従業員と戦時中に車掌を務めた女学校の生徒計185人が犠牲になった。保有する路面電車123両のうち問題なく動いたのは3両だけだったが、原爆投下3日後の9日に運行を再開した。一部が現在も被爆電車として活躍する。

学習会は今年で30回目。参加した広島市立中山小6年の本木真生さん(12)＝同市東区＝は「戦争は改めていけないことだと思った。自分と同じ年ぐらいで被爆して、本当に大変だったと思う。友達にも伝えたい」と話していた。【谷田朋美】

被爆から70年余 走り続ける路面電車で平和を学ぶ 広島 NHK8月4日 13時31分

73年前に原爆の被害を受け修理を終えた翌年から走り続けている路面電車に子どもたちが乗り、被爆の体験を聞いて平和の尊さを学ぶ催しが広島市で行われました。この催しは広島平和教育研究所が開き、4日は親子連れなどおよそ40人が、昭和20年8月6日に広島市役所付近で原爆の被害を受けて、修理を終えた翌年から走り続けている路面電車に乗り込みました。



そして、貸し切りで走る途中、市内に住むパク・ナムジュさん(85)の体験談に耳を傾けました。

パクさんは当時、路面電車に乗っていたところ爆心地から1.9キロの地点で被爆したということで、「突然『飛び降りろ』という声が聞こえたので電車から降りると、外は薄暗く広島の街がなくなっていた。周りでは多くの人が『熱い熱い』と言いながら助けを求めていた。腕の皮膚がただれて垂れ下がり、そのときの恐怖は言葉で言い表せない」と話しました。

そして「今の平和はたくさんの命と悲しみの上にある。皆さんで大切に守ってください」と訴えていました。参加した中学2年の女子生徒は「原爆の恐ろしさがよくわかりました。これからは私たちが、平和の大切さを伝えていかなくてはいけないと思いました」と話していました。

原子力 「人間の能力を超えている」広島で被爆の老名誉教授

毎日新聞 2018年8月5日 11時19分(最終更新 8月5日 11時24分)

広島・長崎の原爆の日にはみんなが平和を祈ってほしい。福島市の自宅で、広島で被爆した福島大名誉教授、星埜惇さん(90)が静かに語った。東京電力福島第1原発事故で2度目の放射能への恐怖を抱き、原子力は人間の能力では扱えないと確信した。広島原爆投下から6日で73年。毎年この日は、無残に死んでいった仲間を思い、静かに追悼する日だ。【柿沼秀行】

1945年8月6日午前8時15分。旧制広島高校生だった星埜さんは、広島県呉市の自宅に戻る列車に乗っていた。車内で激しい衝撃を受けた。呉駅に着いて広島市の方角を見ると、上空に不気味な薄墨色がかかったピンクの雲がもくもくと上がっていた。翌日、広島市内に引き返し、コンクリートの残骸の間に寝かされている被爆者たちの間を、同級生を捜して歩き回った。



書斎で広島での被爆体験を語る星埜惇さん＝福島市北沢又の自宅で2018年8月4日、柿沼秀行撮影

やっと捜した1人を寮に連れ帰ったが、全身をやけどして水を飲むのもやっと。体中にかくウジ虫を取ってやることしかできなかった。3日ほどして静かに息を引き取った。とりすがって泣く両親の姿が忘れられない。その後もおびただしい犠牲者の死体処理をした。大きな穴を掘って次々と死体を入れ、重油をかけて焼いてゆく。「人の死についての感情がなくなっている状態でした」

間もなく、自分の体調も悪くなった。下痢と発熱、倦怠(けんたい)感で1カ月ほど寝込んだが、運良く命は助かった。

戦後は東大農学部に進み、卒業して福島大に赴任。72年、被爆者手帳を取得し、その後、県原爆被害者協議会の事務局長を昨年まで務めた。10年ほど前に直腸がんを患った。放射能への恐怖は尽きない。「被爆者はみんな同じじゃないかな。消えることはありません」

震災は福島市の自宅で体験した。激しい揺れの後、原発事故を知った。以前から「原子力を扱うのは人間の能力を超えている」と思っていた。その恐れが現実になった事故だった。あれから7年。「原発は危ない。何かが起こってか

らでは遅い。だけど変わらない」。もどかしそうに言葉を継ぐ。

毎年8月6日、広島市の平和記念式典は自宅のテレビで見守っている。「唯一の被爆国って言ったって、実際に被爆したのは広島と長崎で、国じゃない。だから国は今も原子力に頼ろうとしている」と憤る。「せめてこの日は、みんなで追悼の思いを一つにしてほしいですね」と静かに話した。

広島原爆 占領下、高校生がつづった被爆手記 69年経てネットで公開

朝日新聞デジタル 2018年8月5日



「原爆だけじゃない。母の弟や父方の親族にも特攻隊として20歳前後で死んでいった人がいる。そんな時代を知らない、若い人たちに読んでほしい」と話す西村利信さん。奥は手記公表のきっかけを作った長男の妻、桂子さん＝千葉県船橋市で、岡本同世撮影

広島に原爆が投下された4年後の1949年につづられた被爆手記が見つかった。原爆による悲惨な被害状況が広がらないよう、連合軍総司令部（GHQ）が目光らせていた占領期に記された極めて貴重な資料。猛火に包まれる広島城やおびただしい数の遺体など被爆直後の広島市中心部の様子が克明に記録されており、インターネットで現在公開されている。

筆者は旧制広島二中2年当時に被爆した西村利信さん（87）＝千葉県船橋市。広島での体験を記憶を元に執筆し、同県立千葉高校の文学クラブが発行した雑誌「道程」に、2回に分けて掲載された。

書きたくなかった記憶

西村さんは、陸軍中佐の父利美さんと同中学1年の弟正照さんを原爆で失った。被爆の翌年に母、きょうだいとともに、母の出身地である千葉に移り住む。同高校へ進んだ後に手記を書いたのは、文学クラブの顧問を務めていた教師から「今書いておかないと（事実が）残せなくなる」と強く勧められたことがきっかけだった。

「本当は書きたくなかった」という記憶を文字にした。勤労奉仕中だった午前8時15分、激しい熱風を浴びて傷を負った。直線距離で4.3キロの自宅に、燃えさかる市内中心部を大きく迂回（うかい）してたどりついたこと。建物疎開の作業をしていた正照さんを探すため、爆心地近くに戻ったこと。無残な遺体。鼻をつく悪臭。耳に残るうめき声――。父が亡くなった状況が記された書類の内容さ

えも転記した。

合計16ページにわたって手記が掲載されたB5版の雑誌2冊を、西村さんはずっと保管していた。読み返したことはなかった。昨年5月に末期の肺がんと診断された後は、身の整理を進めた。2冊は焼却しようと考えていた。

占領下の奇跡

転機は今年に入って訪れる。戦時中の様子を尋ねてきた長男の妻桂子さん（49）に「興味があるなら」と雑誌を手渡したのだ。桂子さんはその内容に驚き、千葉県内で被爆体験の朗読に取り組む央（なかば）康子さん（65）＝同県習志野市＝に相談。埋もれていた手記の存在が明らかになった。



西村利信さんの「原爆体験記」が2回にわたって掲載された県立千葉高校文学クラブの「道程」＝岡本同世撮影

央さんは仲間とともに体験記の公表を西村さんに提案した。手記が書かれたのは戦後の占領期。原爆投下をめぐるGHQの厳しい情報統制は、52年4月にサンフランシスコ講和条約が発効するまで続いた。公表を働きかけた一人で被爆者でもあるジャーナリスト、小野英子さん（79）＝同＝は「没収を逃れた極めて貴重な記録が奇跡的に残っている。ぜひ世に出したかった」と手記の存在を知った驚きを振り返る。

「処分するつもりのもを今さら」。西村さんは提案を受けた直後は乗り気ではなかった。しかし、熱心な説得で徐々に気持ちが変わった。小野さんの父が旧制広島二中で英語教師を務めていた偶然も背中を押した。小野さんの父は1年生とともに被爆し亡くなっている。「いい先生だった」。西村さんは公開することを決めると、事実関係を改めて整理し、文章を手直した。

焦土の広島、後世に

インターネットでの公開は5月末に始まった。69年を経てよみがえった手記は、当時まだ幼かったきょうだいたちにも印刷して届けられた。「大人になってから皆で集まることはよくあったが、父や弟の死んだ状況の話したことはない。みんなびっくりしていた」。半世紀以上連れ添ってきた妻敬子さん（77）も、「私たち家族も、一度も聞いたことがなかった」と話す。

公開が始まった後、西村さんは小野さんらに感謝の手紙をしたためた。「一番喜ばしく意味があるのはあの戦争の悲惨、特に焦土と化した広島姿が何人もの心に残り後の世に言い伝えられ続けるという事です」。被爆体験を残す

ことの意義もつづいた。

新証言掘り起こす働きかけを

「ヒロシマ戦後史」(岩波書店)などの著作があり、被爆手記の収集・分析に長年携わってきた元広島大教授の宇吹暁(うぶき・さとる)さんは、「戦後73年を経て、いまだに新たな証言が出てくるのはすごいことだ。被爆者一人一人がその目を見た事実は、断片的であっても、すべて残していくことが重要。(新証言の発見は)被爆者へ働きかけることで、今後もありうる」と語った。西村さんの手記「原爆体験記」は、公開に尽力した俳優、岡崎弥保さんの公式サイト(<http://ohimikazako.wixsite.com/kotonoha/blank-17>)で閲覧できる。【岡本同世】



西村さんは、十四歳だった旧制広島県立広島第二中学校(現・広島観音高校)二年の時、爆心地から約二キロの東練兵場で勤労奉仕中に被爆。顔にひどいやけどを負いながらも一命を取り留めたが、爆心地近くにいた陸軍中佐の父利美さん=当時(45)=と一つ下の弟正照さんを亡くした。瀕死(ひんし)の正照さんを必死で家へ連れ帰った様子も手記に記されている。

終戦後、西村さんは母の実家があった千葉県に移住。記憶を封印したかったが、県立千葉高校二年の時、所属していた文学クラブの顧問教諭に「今書かないと」と促された。嫌々筆をとると「当時の光景がよみがえった」。一気に書きあげた手記は、クラブ誌「道程」に二号連続で掲載された。

五二年のサンフランシスコ講和条約発効まで、GHQの報道規制で原爆に関する記述は制限され、検閲を受けて没収された時代。西村さんは「内々のクラブ誌だから見つからなかったのでは」と推測する。

現在、西村さんは肺がんで闘病中。身辺整理をしていた今年三月、捨てる物の山から長男の妻桂子さん(49)が、茶色くもろくなった手記を見つけた。桂子さんの勧めで、語り部の活動をしている被爆者、小野英子さん(79)=習志野市=らに見せると「ぜひ世に出したい」と熱望された。

手記には、父の死亡確認証の文面を書き写した部分がある。当時は字面を追っただけだった。あらためて読み返して初めて父の死の状況が頭に入り、向き合うことができた。つらすぎて三人の息子にも話さなかった被爆体験だが、手記の発行へ気持ちが動いた。

手記の終わりに「現在の世界情勢は楽観を許さない」と書いたが、今の方が核戦争の危機が高まっていると感じる。西村さんは「生きているうちに公表できて良かった。焦土化した広島を忘れないでほしい」と語った。

◆ネットで全文公開

西村さんの手記をまとめた冊子「原爆体験記」は約五百冊作られ、広島観音高校同窓会や広島平和記念資料館などに寄贈された。俳人の黒田杏子(ももこ)さん主宰の「藍生(あおい)俳句会」も月刊誌八月号別冊として発行。編集に携わった俳優で語り部活動をしている岡崎弥保(みほ)

GHQ検閲逃れた1949年の手記 14歳、焦土で惨状を見た きょう広島原爆の日

東京新聞 2018年8月6日 朝刊

広島への原爆投下から四年後の一九四九年に書かれた被爆者の手記が三月、六十九年ぶりに見付き、原爆の語り部らが冊子にまとめた。当時は連合国軍総司令部(GHQ)が原爆に関する報道を規制しており、この時期に書かれた克明な記録の公表は少ないという。筆者の西村利信さん(87)=千葉県船橋市=は「あの惨状が忘れられつつある今、若い人たちに読んでほしい」と願う。(原尚子)

「焦土と化した広島の風景を思い浮かべ、忘れないでほしい」と語る西村利信さん=千葉県船橋市で(木口慎子撮影)



「背中におおいかぶさっていた人が側面にドタリと落ちて来た。まさに怪物、焼けただれた真赤な全身、顔はふくれ上がって目はつぶれ(中略)級友の一人であろうが、誰だか全然見当がつかない」。手記には、原爆投下直後の光景が、鮮烈な記憶をもとに生々しく描かれている。

千葉高校文学クラブ誌「道程」に書かれた西村利信さんの原爆体験記

さんのホームページ「言の葉」
(<http://ohimikazako.wixsite.com/kotonoha>)でも公開され、ダウンロードできる。

原本は「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」(東京都千代田区)へ寄贈。同会の栗原淑江さん(71)は「貴重な記録。よくぞ残っていた」と話している。

広島原爆 「鉛のような味がした」エノラ・ゲイ搭乗員証言

毎日新聞 2018年8月4日 07時00分(最終更新 8月4日 07時00分)



広島に原爆を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」の搭乗員ら。機長のティベッツ氏は後列右から3人目＝アリ・メイヤー・ビーザーさん提供



「エノラ・ゲイ」の機長、ポール・ティベッツ氏らの証言が収録されたテープ＝広島市中区の前原資料館で2018年7月20日、寺岡俊撮影

1945年に広島に原爆を投下した米B29爆撃機「エノラ・ゲイ」の搭乗員に対するインタビューを収めた録音テープが見つかり、広島市の原爆資料館に寄贈された。機長は自殺用薬物を携帯するなど極秘任務だったことを明かし、投下時は「光に包まれ、(口の中で)鉛のような味がした。ほっとした」と証言。資料館によると、これまで未確認の資料で、書籍の取材過程で収録されたとみられる。資料館は「機内の様子や乗組員の心情が詳しく分かり重要だ」としている。

寄贈されたのはインタビューの録音テープ27本(計約30時間分)や570ページに及ぶインタビューの書き起

こしなどの英文書類。所有していた日本人の遺族が昨年6月に寄贈した。添え書きなどから、英国人のゴードン・トマス氏らの著作「エノラ・ゲイ」(77年出版)の取材資料の複製とみられる。

テープには搭乗員のうち、いずれも故人で機長のポール・ティベッツ氏、投下ボタンを押した爆撃手のトーマス・フィアビー氏ら5人の音声が収められ、長崎に原爆を投下した爆撃機「ボックスカー」にも搭乗したヤコブ・ビーザー氏が記した回想録もあった。

インタビューでは、原爆投下に至る経過などを詳細に尋ねている。聞き手が「搭乗員がなぜ拳銃を携帯しているのか」と問うと、ティベッツ氏は「護身用」と説明したうえで「青酸カプセルも持っていた」と証言。墜落して日本軍に捕らわれた際の自殺用で、原爆投下が極めて機密性の高い任務だったことを示す。

45年8月6日未明に太平洋・テニアン島の基地を離陸したエノラ・ゲイは広島へ着々と近づき、投下目標とされた市内中心部のT字形の相生橋に到達した。

午前8時15分。爆発の瞬間についてティベッツ氏は「光に包まれた時、鉛のような味がした。きっと放射線(の影響)だろう。とてもほっとした。(原爆が)さく裂したと分かったから」と振り返っている。

エノラ・ゲイは投下直後に右に急旋回して退避したが、機体まで衝撃波が届いた。「ブリキの中において、外から誰かにハンマーでたたかかれているような音が響いた」と表現。窓越しに、きのこ雲が飛行機の高さまで立ち上るのを目撃したという。

資料館は今後、関係者の了解を得て音声データを公開し、専門家に分析を委ねることも検討する。

小山亮学芸員(38)は「搭乗員一人一人の生々しい証言が多く含まれており、歴史的に価値がある」と話している。【寺岡俊、大久保昂】

広島 原爆投下前の町並みをVRで再現 福山工の生徒ら

毎日新聞 2018年8月5日 14時41分(最終更新 8月5日 15時22分)



広島県立福山工高が仮想現実(VR)で再現した、原爆で破壊される前の広島市細工町(現中区)の町並み。左の2階建ての建物は爆心直下にあった島病院＝広島県立福山工

高計算技術研究部提供

「1発の原爆で生活を失う怖さと、復興のすごさ」を体感で伝えようと、広島県立福山工高（福山市野上町3）の計算技術研究部が、爆心直下にあった広島市細工町（現中区）の原爆投下前の町並みをバーチャルリアリティ（VR＝仮想現実）で再現した。2016年から写真や絵はがきなどを基に開発し、被爆者らに繰り返し見てもらい、「生活感を感じられる町並み」を目指した。再現作業を通して、生徒たちは「原爆についてより深く理解することができた。だからこそ伝えていきたい」と話す。【松井勇人】



被爆前の町並みを再現する仮想現実（VR）の作成を行う広島県立福山工高計算技術研究部の生徒と長谷川勝志教諭（前列左端）。画面は制作中の県産業奨励館（現原爆ドーム）のらせん階段（左）と基になる図面＝広島県福山市野上町3の県立福山工高で2018年7月、松井勇人撮影

完成したVRは、上空約600メートルで原爆がさく裂した島病院（現島内科医院）を中心に南北約600メートルを自由に巡ることができる。病院の中庭や旧広島郵便局の1階を見学できるほか、元安川で遊んだという証言から階段を下りて川の中に入ることもできる。全天球カメラで撮影した現在の町並みが映し出されるスポットが7カ所あり、再現VRと現実の映像を比較することも可能だ。

顧問の長谷川勝志教諭（52）によると、VRの特徴である没入感を高めるため、写真などに残る壁の凹凸を再現したり、当時の工業力からガラスの透明度を割り出したり、どの角度から見ても違和感のないような光の反射などきめ細かい表現を心がけた。長谷川教諭は「資料や証言に基づいて正確な再現を目指した」と話す。現在は平和記念公園となっている旧中島本町や旧猿楽町を20年までに作り上げる予定だ。

これまでに、細部描写をしない試作を公開し、被爆者ら延べ1300人に体験してもらい、感想を聞いた。長谷川教諭は「当時を知る人に早く見てもらおうと開発を急いだが、体調を崩して行けないと言われるなど、被爆者の高齢化を感じた」という。

1年時から関わり、県産業奨励館（現原爆ドーム）の内部を作っている中川勇飛部長（18）は「見た人が当時の思い出を懐かしそうに語ってくれる。思い出を引き出せるところにVRの力を感じる」と話す。原爆についてはこれまで「多くの市民が被害に遭ったことに怖さを感じていた」

と話し、制作に関わるまでは、正面から考えることを避けてきたが、作業を通して自然と先輩たちから話を聞く機会が増えた。「怖さは消えないが、より深く理解することができた」と話した。

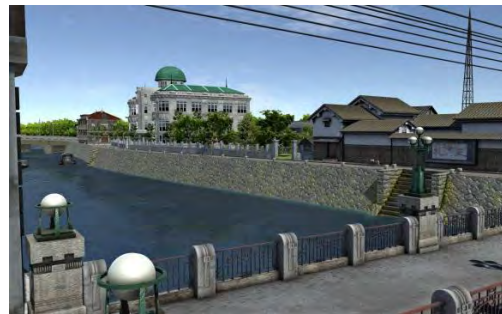
原爆の惨禍、VRやAIの力で伝える 広島の高校生ら 日経新聞 2018/8/5 12:00

広島の高校生らが仮想現実（VR）やCG（コンピュータグラフィックス）、人工知能（AI）技術を使い、原爆投下前後の街の情景の再現に挑む。惨禍を生き抜いた被爆者の高齢化が進み、記憶の継承は大きな課題。6日に73回目の「原爆の日」を迎える広島で、若い力が伝承の担い手としての一歩を踏み出している。

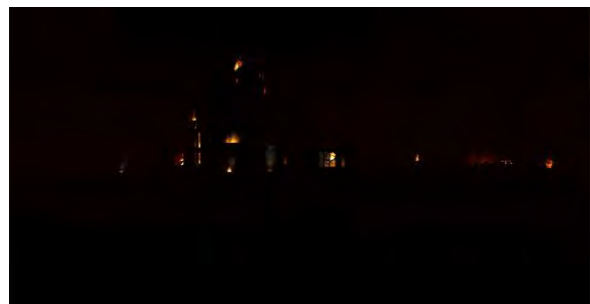
専用ゴーグルとイヤホンをつけると、広島市中心部の産業奨励館（現・原爆ドーム）前の道に降り立った。商店や郵便局が並び、川沿いで緑の木々が揺れセミが鳴く。突然「ファン」とサイレンが鳴った後、轟音（ごうおん）と真っ白の光に襲われ、目がくらんだ。一瞬で街は見渡す限りの焼け野原になっていた。

広島県立福山工業高校（同県福山市）の生徒らがVR技術で再現した爆心地の様子だ。2016年に制作を開始、20年までに爆心地の半径約150メートルの情景を映像と音でよみがえらせる。完成後はイベントなどで公開する予定だ。

CGなどで映像を制作する計算技術研究部の生徒らはこれまでに約100人の被爆者から話を聞き、当時の写真や産業奨励館の設計図などを収集。証言や資料を突き合わせながら建物の高さや地面の色、音を映像として作り込んでいる。



VRで再現した原爆が投下される直前の産業奨励館（現・原爆ドーム）周辺＝広島県立福山工業高校計算技術研究部提供



VRで再現された原爆投下直後の原爆ドーム周辺は炎が上

がり、黒煙が立ちこめて暗闇に包まれた＝広島県立福山工業高校計算技術研究部提供

3年の中川勇飛さん(18)は写真を分析するうちに「原爆が投下された瞬間、この建物にはどのような人がいたのだろう」と考えるようになった。奪い去られたものを知ることで、原爆の恐ろしさをこれまで以上に実感したという。

「その恐怖を肌で感じてもらうために失われた街をより精緻に再現したい」と中川さん。「映像は言葉や世代を越え、多くの人にメッセージが伝えられる」と意気込む。

広島女学院高校(広島市中区)の生徒の有志7人は17年、AI技術を使って原爆投下前に撮影された白黒写真をカラー写真として再生する取り組みを始めた。これまでに被爆者などから借りた家族写真など約140枚を生まれ変わらせた。今秋にも展覧会を開き、公開する。



家族とスイカを食べる高橋久さん(右から5人目)はカラー化した写真から、フラッシュが怖くて顔を覆ったことを思い出した＝広島女学院高の庭田杏珠さん、東京大の渡邊英徳教授提供



AIを活用しカラー化した写真＝広島女学院高の庭田杏珠さん、東京大の渡邊英徳教授提供

早稲田大の石川博教授らが開発したAIを活用。AIは蓄積データを基に、白黒写真に写る肌や衣服の色を推定し自動で色づける。生徒は「試作品」を持って被爆者らに話を聞き、実際の色に近づくよう修正していく。

色のついた写真を見て、記憶がよみがえる人も。家族のだんらんでの笑い話など何気ない思い出が多いが、写真に写る人が撮影後、原爆によって亡くなったという現実も突きつけられる。

リーダーの2年、庭田杏珠さん(16)は「カラー写真は白黒に比べ、被写体を身近に感じる。写真を見て自分の家

庭が突然失われたらと想像し、平和の大切さを実感してくれたら」と話す。

同高でデジタル技術を生かした平和学習を指導する東京大の渡邊英徳教授は「デジタル技術で過去の資料を再生し、新しい伝え方を生み出すことは伝承の幅を広げる」と説明。「若い世代が作業を通じて原爆と真剣に向き合うことが、未来への記憶の継承につながるはずだ」と期待している。

ICAN川崎哲氏 核廃絶めぐり若者と意見交換 広島 NHK2018年8月4日 18時03分

核兵器禁止条約の採択に貢献し、去年、ノーベル平和賞を受賞した国際NGO、ICAN＝核兵器廃絶国際キャンペーンの川崎哲国際運営委員が、広島市で核兵器の廃絶について若い人たちと意見を交わしました。

広島市東区で行われた催しには、川崎さんのほか、小学生から大学生の16人が参加しました。

この中で川崎さんは、被爆者とともに世界各地で核兵器禁止条約の批准を求めてきたこれまでの活動を紹介したうえで、「自分自身の経験がなくても、『自分はこう聞いたよ』と、皆さんの世代が迫力をもって核の恐ろしさを伝えていくことが大切です」と語りかけました。

参加した子どもから「どこの国も核兵器を持たなかったらいいはずだがなぜ核廃絶に向かわないのか」などと質問が出たのに対し、川崎さんは「核があったほうが世界のバランスがとれるという考え方が案外多く、それを変えることが課題だ。皆さんにもその方法を考えてほしい」と話していました。

参加した高校2年の女子生徒は「広島に生まれた身として、これまで聞いてきた被爆の話伝えていくことが役目なのかなと感じました」と話していました。

川崎さんは「みんなすごくちゃんと考えていると思いました。広島だけでなく全国で若い世代との意見交換をやっていきたい」と話していました。

核兵器禁止条約 オーストリア国連大使 日本の役割に期待

NHK8月6日 4時56分



「広島原爆の日」を前に、去年採択された核兵器禁止条約を中心となって推進してきた国の1つ、オーストリアの国連大使がNHKのインタビューに応じ、条約に反対する日

本について「唯一の被爆国として、核軍縮に取り組むよう核保有国を説得してほしい」と述べて、被爆国としての役割を果たすことに期待を示しました。

核兵器禁止条約は去年7月、ニューヨークの国連本部で採択されましたが、アメリカなどの核保有国や核の傘のもとにある日本などは反対していて、批准したのは、発効に必要な50カ国に対して14の国と地域にとどまっています。こうした状況の中、インタビューに応じたオーストリアのキッカート国連大使は、条約の現状について「甚大な被害をもたらす核兵器をなくすという条約の原点に戻って、多くの国に批准するよう促している。遠くない将来に発効するのは間違いない」と述べて、楽観的な見方を示しました。そのうえで、「条約は核軍縮に向けて重要な役割を果たすもので、発効すれば核保有国も無視できなくなる。核軍縮に向けた協議を促すことにもつながる」と改めて条約の意義を強調しました。

さらに、条約に反対の立場の日本については「核兵器がもたらした非人道的な結末を知る唯一の被爆国として、道徳的なリーダーシップを発揮し、核軍縮に取り組むよう核保有国を説得してほしい」と述べて、日本が被爆国としての役割を果たすことに期待を示しました。

広島、6日に原爆の日＝73回目、核なき世界へ発信



73回目の広島原爆の日を前に、多くの人々が訪れた平和記念公園＝5日午後、広島市中区

広島市は6日、73回目の原爆の日を迎える。広島市中区の平和記念公園では、午前8時から市主催の「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」（平和記念式典）が行われ、被爆者や遺族、安倍晋三首相らが参列する。

核兵器禁止条約の成立に尽力した中満泉国連軍縮担当上級代表（事務次長）も、昨年に続き出席する。



松井一実市長は平和宣言で、国際的なNGOの連合体「核

兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）のノーベル平和賞受賞や、朝鮮半島の緊張緩和の動きに言及。「被爆者の思いが世界に広まりつつある」と歓迎する。

一方で、自国第一主義の台頭や、核兵器の近代化が進行する現状への懸念も表明し、核廃絶に向けた取り組みが各国の為政者の理性に基づく行動で継続されるよう訴える。

厚生労働省によると、被爆者健康手帳を持つ人は今年3月末時点で全国に15万4859人。平均年齢は82.06歳で、昨年より0.65歳高くなった。（時事通信2018/08/05-14:55）

広島 6日、73回目の「原爆の日」 平和記念式典も 毎日新聞 2018年8月5日 19時33分(最終更新 8月5日 20時49分)



原爆ドームの前を流れる元安川にともされた「かがり灯」＝広島市中区の平和記念公園で2018年8月5日午後7時32分、久保玲撮影

広島は6日、73回目の「原爆の日」を迎える。広島市中区の平和記念公園では午前8時から平和記念式典が開かれ、被爆者や遺族、安倍晋三首相らと各国代表が参列する。被爆地は慰霊の祈りに包まれ、核兵器廃絶への誓いを新たにす。

核問題を巡っては6月の史上初の米朝首脳会談で「朝鮮半島の非核化」に合意したが、具体的な道筋は示されていない。核兵器を違法とする核兵器禁止条約への批准は現在14カ国・地域だけ。「核抑止論」を背景に、核保有国だけでなく唯一の被爆国・日本も参加せず、条約の発効に必要な50カ国・地域には達していない。

一方、被爆者と連帯し、禁止条約の採択に尽くした国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」が昨年のノーベル平和賞を受賞。若い世代が核廃絶へ新たな潮流を生み始めた。

式典には過去3番目に多い85カ国と欧州連合（EU）の大使らが参列する予定。6日の平和宣言で松井一実・広島市長は「被爆者の思いが世界に広まりつつある」とする一方、世界で台頭する「自国第一主義」に警鐘を鳴らす。

そのうえで各国首脳らに「理性」に基づき、核軍縮の実行を訴える。日本政府には禁止条約の発効に向け、憲法が掲げる平和主義を体現し、対話と協調を進める役割を果たすよう求める。

全国の被爆者健康手帳の所持者は今年3月末で15万4859人と過去最少となり、平均年齢は82.06歳に達した。【寺岡俊】

6日は広島原爆の日 核禁止条約「一里塚」に 共同通信 2018/8/5 17:48



広島市の平和記念公園で千羽鶴をささげる子どもたち＝5日午後

広島は6日、原爆投下から73年の「原爆の日」を迎える。広島市中区の平和記念公園では午前8時から「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」（平和記念式典）が営まれる。

松井一実市長は平和宣言で、核保有国に核拡散防止条約（NPT）が義務付ける核軍縮の誠実な履行を要求した上で、国際社会に核兵器禁止条約を核廃絶への「一里塚」にするよう求める。

宣言は朝鮮半島の緊張緩和の進展に期待し、自国第一主義の台頭や核兵器の近代化など世界の現状を「冷戦期の緊張関係の再現」と懸念を表明。歴史を忘れた時に人類は再び重大な過ちを犯すとして、「ヒロシマを継続して語り伝えなければ」と主張する。

広島 原爆投下から73年 核兵器廃絶に向けた訴えを発信へ

NHK8月6日 5時04分



広島に原爆が投下されてから6日で73年です。世界の核軍縮の進め方をめぐっては、核保有国を中心とした国々と非核保有国との対立が激しくなっていて、被爆地・広島は、原爆の犠牲者を追悼するとともに、核兵器のない世界に向けた訴えを改めて国内外に発信することになっています。

原爆が投下されてから73年となった広島市の平和公園には、夜明け前から被爆者や原爆で亡くなった人の遺族などが訪れ、追悼の祈りをささげています。

福井県から訪れた、父親が被爆者だという68歳の男性は「父親が去年、亡くなったことをきっかけに、ことし初めて、この日に広島を訪れました。父は生前、平和の大切さを自分によく話していたが、ここに来ると、その気持ちがわかるような気がしています」と話していました。

6日の平和記念式典は、安倍総理大臣や85の国の代表らが参列し、午前8時から始まります。

式典では、この1年に亡くなった人や新たに死亡が確認された人、5393人の名前が書き加えられた31万4118人の原爆死没者名簿が原爆慰霊碑に納められます。そして、原爆が投下された午前8時15分に参列者全員で黙とうを捧げます。

世界の核軍縮をめぐっては、去年、国連で核兵器禁止条約が採択され、反対する核保有国や核の傘のもとにある国と、非核保有国との対立が激しくなっています。

さらに、アメリカのトランプ政権がことし2月、核戦力の近代化を進める新たな核戦略を打ち出すなど、核兵器廃絶への道筋はいまも見いだすことができていません。

広島市の松井一実市長は、平和宣言の中で、「世界では自国第一主義が台頭し核兵器の近代化が進められている」としたうえで、日本政府に対し、「国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たすことを求める」と訴えることにしています。

原爆投下から73年となる6日、被爆地・広島は、原爆の犠牲者を追悼するとともに、核兵器廃絶に向けた訴えを改めて国内外に発信することになっています。

「胎内被爆者」が集会 手記出版に向け証言まとめへ 広島 NHK2018年8月5日 19時03分



6日の広島原爆の日を前に、母親のおなかの中で被爆した「胎内被爆者」の人たちが集会を開き、今後、手記の出版に向けて被爆体験の証言をまとめていくことになりました。原爆が投下された際に母親のおなかの中で被爆したいわゆる「胎内被爆者」は、全国に7000人余りいるとされ、全国組織の連絡会を設けています。

連絡会は、5日広島市で年に一度の集会を開き、広島県や長崎県、東京都など7つの都と県から胎内被爆者20人が

参加しました。

参加者は、まずこの1年間で亡くなった被爆者に対し、黙とうをささげました。

そして胎内被爆者のひとりで広島市の二川一彦さんが、この1年の活動を報告するとともに「被爆者を親に持ついわゆる被爆2世のように、『胎内被爆者』もより多くの人に知ってもらふ必要がある」と述べました。

原爆投下から73年がたち、親の世代の被爆者が亡くなるなか母親の胎内にいるときに被爆した「胎内被爆者」は、最も若い被爆者ともいわれています。

連絡会では、再来年の手記の出版に向けて、親の世代から聞いてきた被爆の悲惨さや胎内被爆者自身の歩みなど被爆体験の証言をまとめていくことになりました。

連絡会の三村正弘事務局長は「被爆者が年々減り続けているからこそわたしたちも被爆の恐ろしさを伝えていかなければならない」と話していました。

比叡山延暦寺で平和祈る集い 900人が参加

共同通信 2018/8/4 20:57



大津市の比叡山延暦寺で開かれた「世界平和祈りの集い」
＝4日

大津市の比叡山延暦寺で4日、国内外の宗教家らが参加し「世界平和祈りの集い」が開かれた。1987年に世界の宗教指導者を集めて開かれた「比叡山宗教サミット」を記念した行事で、小中高生や一般参加者を含めて約900人が集まった。

集いでは、透明の球体の中に白色や青色などのたくさんの折り鶴を入れて、地球に見立てたモニュメントを完成させた。「世界平和の鐘」の音が鳴り響く中で参加者が黙とうをささげた。折り鶴は後日、広島市の平和記念公園に届ける予定。

森川宏映天台座主は「恒久平和実現のために祈りをささげ、一層努力していく」と平和祈願文を読み上げた。

宗教を超え世界平和を願う...比叡山延暦寺に900人

読売新聞 2018年08月05日 13時21分



世界平和を願って黙とうする各宗派の代表ら（大津市で）世界の宗教者が教義の違いを超えて世界平和を願う「世界平和祈りの集い」が4日、天台宗総本山・比叡山延暦寺（大津市）で開かれた。約900人が戦争やテロ、貧困、弱者への迫害などがない世界の実現に向けて祈りをささげた。

「集い」は、1986年にローマ法王ヨハネ・パウロ2世（当時）の提唱でイタリアで開かれた「平和祈願の日」の精神を継ぎ、天台宗や延暦寺などが87年から毎年夏に開いている。

森川宏映・天台座主（92）が祈願文を読み、平和の実現に最も重要なのは他者の存在を認めることだと指摘。「現実社会では、多様性を認め、弱者に配慮することはほとんどない。我意を通したものが正しいとされる風潮だ」として、他者に尽くす大切さを説いた宗祖・最澄（伝教大師）

もうこりたの「忘己利他」の精神を、今こそ取り戻すべきだと訴えた。

この後、キリスト教やイスラム教の代表らが壇上に並んで、「平和の鐘」の音に合わせて黙とう。中高生が平和を考える作文を読み上げると、会場から拍手が起こった。最後は参加者全員で手をつないで、平和のために自分ができることをしようと誓った。

NZからヒバクシャ追悼 「ヒロシマ・デー」

東京新聞 2018年8月6日 朝刊

5日、ニュージーランドのクライストチャーチで行われた「ヒロシマ・デー」＝デュースさん提供



広島への原爆投下の日に先立ち、ニュージーランドのクライストチャーチで五日、原爆犠牲者に思いをはせる集会「ヒロシマ・デー」が営まれた。主宰者のケイト・デュースさんの仲間のマーカス・コルさんが本紙にレポートを寄せた。

同国は英米仏による南太平洋での核実験への反発などから、非核を国是としている。集会は一九七六年から例年この時期に開かれ、近年では市中心部の観光名所クライストチャーチ植物園内にある「世界平和の鐘」前での開催が続いている。

この日は国会議員やクライストチャーチの市議、子どもも含めた市民ら百人超が参加。広島への原爆投下時刻の午前八時十五分（現地時間同十一時十五分）にリアヌス・ダルジール市長が鐘を鳴らし、参加者らは一分間黙とうした。

市長は「子どもらに平和の大切さを伝える上で、ヒロシマ・デーは大切だ」とスピーチした。南太平洋など世界の「ヒバクシャ」への言及もあった。鐘の周辺にはキャンドルやランタンが並べられた。集会では日本人女性らによる合唱も披露され、参加者全員が平和の鐘を鳴らした。（安藤美由紀）

長崎原爆 惨状伝える68点 資料館で収蔵展始まる

毎日新聞 2018年8月4日 09時01分(最終更新 8月4日 09時01分)



収蔵資料を見る来館者＝長崎原爆資料館で2018年8月3日、今野悠貴撮影



爆心地近くで見つかった、変形したとっくり＝長崎原爆資料館で2018年8月3日、今野悠貴撮影

昨年7月以降に長崎原爆資料館に寄贈された資料を展示する「収蔵資料展」が3日、長崎市平野町の同館で始まった。被爆の惨状を伝える被爆者の遺品など、12人から寄せられた計68点が並ぶ。入場無料。【今野悠貴】

長崎県立長崎高等女学校の教師で、被爆から約1カ月後に31歳で死亡した女性の日記では、原爆投下前日までに学徒動員された生徒の様子や、被爆後に生徒の安否を尋ね回った記録が詳細に記されている。また、爆心地付近で見つかったとっくりは、熱で変形している。

他に、「爆死」と記載された罹災（りさい）証明書、爆風で腕に突き刺さったガラス片、被爆して亡くなった人を焼く遺族を描いた絵画なども展示され、当時の惨状を生々しく伝えている。

東京都から旅行で訪れた練馬区立開進第三小5年、大島瑛麻（えま）さん（11）は「原爆によってたくさんの人が死んだんだと実感した。原爆は皆の生活を大きく変えてしまう」と話した。



8月9日の長崎原爆の日に合わせて、犠牲者の慰霊や平和を祈る催しなどが各地で開かれる。

◆長崎平和音楽祭 11日午後2時、長崎市平野町の市平和会館ホール。浦上天主堂の「被爆マリア像」をモチーフにした歌や、広島で被爆したバイオリンの演奏など。一般1000円、中高生500円。

◆平和の灯 8日午後6時45分、長崎市松山町の公園内平和の泉周辺。市民が作った約5000個のキャンドル点灯や、コンサートもある。

◆キッズゲルニカ 31日まで長崎市松山町の爆心地公園脇の川の斜面など。子供たちが平和を願って描いた巨大壁画を展示。

◆上映会「世界のショートフィルムから見る～戦争と生きる力」 8、9日、長崎市平野町の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館でいずれも午前10時から。シリア内戦や

難民などをテーマにした実写映画やアニメ映画8本を放映。無料。

◆放射線影響研究所一般公開 8、9日、長崎市中川1の同研究所。研究のパネル展示や体験型イベント。8日午後2時、職員が子供向けに放射線を解説する。

◆企画展「ヒバクシャ世界を動かす」 12日まで長崎市松が枝町のナガサキピースミュージアム。6日休館。ICANのノーベル平和賞を後押しした、ピースボートの活動などを写真でパネル展示。

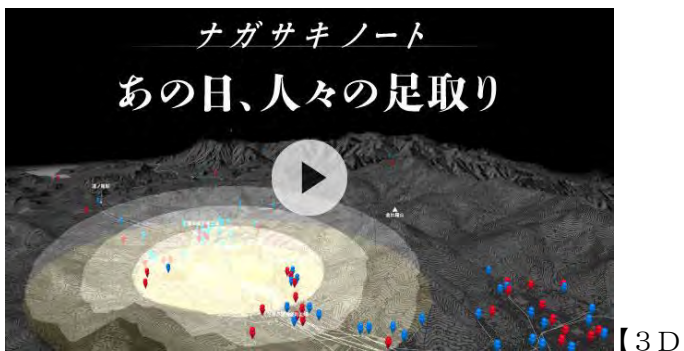
◆第39回ながさき8・9平和展 8～12日、長崎市出島町の県美術館。市民が作った絵画、写真など。入場無料。

◆第46回原爆殉難者慰霊祭・平和への祈りコンサート 8日午後6時半、長崎市平野町の爆心地公園。グレゴリオ聖歌やオラショのコンサート。

(ナガサキノート) 元球児が見た原子雲「赤黒かった」
朝日新聞デジタル田部愛・25歳 2018年8月3日 16時45分

全国高校野球選手権大会が今夏、100回目を迎える。大会が始まったのは1915年。1世紀の歴史の中で、球児の夢の舞台が途切れたこともあった。太平洋戦争の終戦までの5年間、大会が中断された。

長崎大会の舞台となる長崎市の長崎県営野球場（ビッグNスタジアム）は爆心地から約400メートルの場所にある。1945年8月9日当時の町名は「駒場町」。長崎原爆戦災誌によると、原爆によって町内の建物はほとんど全焼し、町で唯一即死を免れた女性も3日後に息絶えた。



【3D特集】ナガサキノート あの日、人々の足取り



原爆炸裂（さくれつ）

の15分後、川南工業香焼島造船所から撮影された写真(松

田弘道氏撮影、長崎原爆資料館提供)



中村豊さん（1928年生まれ）

焼け野原だった場所に野球場ができ、長崎の球児にとっての「聖地」となったのは戦後のことだ。

県営野球場で今年の長崎大会の開会式が行われた7月6日。その場に原爆を経験した5人の元球児が集った。

その一人、中村豊（なかむらゆたか）さん（89）は1942年、旧制海星中（今の海星高）に入学し、野球部へ入った。周囲の勧めで軍隊への入隊を希望し、死を身近に感じるなか、野球だけが生きがいであった。だが、戦況が悪化すると、学校の指示でグラウンドを耕し、芋畑にした。

「やー!」「よいしょ」。今年6月の平日の昼下がり。長崎小江原1丁目のグラウンドにユニホーム姿の男性15人の声が響く。還暦から85歳までが所属する野球チーム「長崎マリンマスターズ」のメンバーがバッティングの練習をしていた。

グラウンドで練習を見守り、ボールの行方を追う、がっしりとした上半身の男性。監督の中村さんは少年時代から選手として、そして指導者として、常に野球と一緒に歩みつけてきた。「若いころには、ここまで続くとは思いませんでした」と笑う。

「今思うと馬鹿みたいやけど、当時は死ぬことしか考えとらんかった」。旧制海星中への入学当時、戦況が悪化し、「役立つかわからない」と授業を嫌った。唯一の楽しみだった野球部の活動は途絶えた。目標がなく、先生の勧めで軍隊への入隊を決めた。

終戦後、卒業を延ばして、復活した野球部の主将になった。やっと、好きな野球が出来る——。喜びをかみしめた。

中村さんは長崎市稲佐町1丁目（現・旭町）で生まれ育った。家の前には浦上川が流れる。子どもの頃はここが遊び場で、近所の子どもたちと一緒に、真冬以外はほとんど川で泳いでいたという。

これまで大きな病気をせず、今も週に2回は野球の練習に出かけるほどの健康体。「ほかに遊ぶところもない。だから体が丈夫になったんじゃないかな」と、中村さんは振り返る。「遊ぶのに忙しかった」少年が、戦争を意識することはあまりなかった。

近所で暮らすのは漁業者か三菱重工の工員がほとんどだったという。中村さんの家の周りに魚屋はなかったのに、魚を取った人が近所に分け合っていたからか、食卓にはよく魚が出てきた。

父親の音助さんは三菱重工の工員で、三菱造船所立神工場に勤めていた。姉が2人いたが、1人は13歳も年が離れ、もう1人は四つ年上。2人とも学校を卒業すると、働きに出るなどして家を離れたという。

中村さんは子どもの頃、浦上川で泳ぐ以外に、近くの広場で「野球に似た遊び」をすることがあったという。当時は物資が十分になく、野球のボールもなかった。

朝日尋常小学校（今の長崎市立朝日小学校）に通っていた中村さん。6年の時、満州にいた姉が「一番欲しい物」を送ってくれた。野球のグラブだ。『外地』はものが豊富だったみたい。戦況が悪化して野球ができなかった時期も自宅で大切に保管し、戦後、野球を再開した時に使い続けた。

中村さんは小学校を卒業後、先生のすすめで旧制海星中に入った。受験項目は筆記試験のほか、50メートル走や懸垂、走り幅跳びなど体力を試すものも多かった。

小学校時代は戦争のことを気に留めていなかった中村さんだが、中学に入ると意識せざるをえなくなった。先生たちは生徒に軍隊へ志願するよう勧めた。夜、自宅に帰った後も、空襲警報が鳴ると、学校が割り当てた公共施設の警備に行かなければならなかった。

旧制海星中では、すぐに野球部に入った。新入部員は8人、2～5年生は15人ほど。志願兵になった人もいたため、上級生は比較的少なかったという。1年生は球拾いばかりさせられたが、中村さんは熱心さを買われたからか、よく先輩に連れられ、試合の手伝いに行った。

当時、次第に戦争の色が濃くなっていた。1915年に始まった「全国中等学校優勝野球大会」（現在の全国高校野球選手権大会の前身）は1941～45年、戦争のために中断した。

今でこそ、選手権大会がある甲子園球場は球児たちの憧れの場所だが、中村さんたちは当時、あまり執着していなかったという。テレビがなく、今ほど情報が知れ渡っていなかったこともあるが、なにより「野球が出来さえすればよかった」という思いが強かった。

しかし、2年生になると、先生の指示で長崎市の中小島にあった野球部のグラウンドを耕し、芋畑にした。野球はできなくなり、時々、畑に肥料をまき、水をあげに行った。

大好きな野球をする機会を、戦争に奪われた。当時の夢を尋ねると、少し考えた後、中村さんは「特にないですが、強いて言えば軍人じゃないですか」と答えた。「戦時中、大きな希望はなかった」

1944年の夏、先生に勧められ、日本軍の海軍飛行予科練習生（予科練）の試験を受けた。「家族はいい気がしな

いだろう」と、親には黙っていた。筆記試験に合格し、秋には2次試験を受けに佐世保の海兵団の施設に行った。走力などの体力を測定されたほか、回転する機械に座らされ、止まった後に目の前の教官のところまで歩いていけるかといったことも試された。

結果は合格。「うれしかった。跳びはねて喜ぶほどではなかったけれど」

その後、家へ帰ると、母チヨさんが仏壇の前に座って中村さんの帰りを待っていた。隣に呼ばれ、「なして黙って受けたと」と怒られた。親に内緒で試験を受けた友達にも、家族に怒られる人は少なくなかったという。

中村さんは「頭の中は、中学の途中でとまっている」と笑う。戦況が悪化し、旧制中学の途中から、同級生たちとともに香焼村（現在の長崎市香焼町）にある川南工業の香焼島造船所に動員された。

香焼村に行くため、大波止や大浦などから通勤船が出ていた。中村さんも旭町から木造船に乗って出勤した。長崎原爆学校被災誌には、大波止と造船所を結ぶ定期船には海星中や女学校の生徒が合わせて800人あまり詰め込まれ、雑踏の中で勉強にいそしむ人もいたという証言がある。

中村さんは鉄板と鉄板をつなぐための穴をドリルであける作業などを担当した。工場では、香焼島にあった「福岡俘虜（ふりよ）収容所第2分所」のオランダ人捕虜が鉄板を運んだり、ドリルを修理したりしていた。鼻の下にひげをはやし、40～50代に見えたが、一緒に作業するうちに自然と仲良くなった。おなかをすかせた捕虜がいると、中村さんは時々、持っていた芋を分け、代わりにたばこをもらった。

育ち盛りの中村さんにとって、動員された川南工業の造船所で働くモチベーションになったのが「皆勤パン」。1カ月休まず出勤した人に月末配られたパンのこと。コッペパンの倍くらい長さがあったといい、「あれに釣られて働いた」。

お昼は家から持ってきた弁当を食べた。ご飯と梅干しと昆布。白米がなかなか手に入らない時代だったが、動員されている人には「加配米」として多く配給されたほか、母の故郷の諫早から農産物を持ってきていた。長崎よりは食料事情が良かったようだ。

昼休みは岩場で仲間と泳いだり、工員とキャッチボールをしたりして過ごした。

1945年7月31日、工場で空襲警報がなり、海に面した防空壕（ごう）に避難した。警報が解除されて外に出た後、「ヒュー」という音が聞こえた。急いで壕の中に戻ると、近くの海に爆弾が落ちる音が聞こえてきた。造船所が低空爆撃された長崎市の第4次空襲。しばらくすると、海面に魚がたくさん浮いてきた。

1945年8月9日。中村さんはいつものように動員先の川南工業香焼島造船所に行った。午前中に空襲警報が鳴

ったが解除され、工場で仲良くなった工具に「腹が減ったな」「飯でも食おうか」と誘われた。近くにあった工員の住宅の2階で、中村さんは畳の上にあぐらをかき、新聞を読んでいた。

突然、窓の外がピカッと光った。中村さんは工場で電気がショートしたのだと思った。窓の外に目をやったその時、大きな音がした。「ドーン」。数秒後、窓からの風で読んでいた新聞がふわっと浮いた。爆心地から約10キロ。爆風だったのだろう。

爆弾が落ちた場所を確認しようと、急いで近くの山に登った。普段は監視の人がいるはずだが、その時は見当たらなかった。山の上まで行き、防火水槽を見つけた。暑かったので、中村さんは服を脱ぎ、水の中へ飛び込んだ。見上げた上空に、飛行機が飛んでいた。長崎市街に目を向けると、きのこ雲が上がっていた。

長崎原爆戦災誌によると「長崎で唯一のもの」とされる原子雲の写真が、川南工業香焼島造船所から撮影されている。

中村さんも、この写真が撮られた近くから同じ雲を見ていた。写真は白黒だが、雲の右下部分は「赤黒かった」。中村さんは撮影時間より少し早く見たようで「もったきのこの形をしていた」と振り返る。

山の上の防火水槽の中に入っていた中村さんはきのこ雲を見てすぐ、造船所に戻った。周りの人は「新型爆弾が落ちたようだ」と話していた。

船で長崎に戻ろうと思ったが、栈橋に着くと「夕方まで船は出ない」と言われた。原爆が落とされた直後に、心配した工員や動員学徒を大勢乗せた船がすでに出航したようだった。中村さんは仕方なく、夕方まで待った。

その後、乗れることになった船はいつもの通勤船でなく、小舟だった。5人ほどが乗り込んだ。普段は40分から1時間ほどで着いたが、その時は倍以上の時間がかかった。

自宅のある旭町に向かった。今の女神大橋がある付近まで来たとき、5歳くらいの子どもの遺体が海に浮かんでいるのが見えた。船長に「死体が浮いていますよ」と声をかけたが、無視されてしまった。船長は長崎で起きていたことを知っていたのだろう。

中村さんは旭町の栈橋で下り、そこから徒歩5分ほどの自宅に向かって歩き始めたが、進めば進むほど、立ち並ぶ家が傾いているのに気づいた。自宅裏にある雑貨店は崩れ、近くの電柱にくくりつけられていたのか、馬が下敷きになっているのが見えた。川を隔てた向こう岸では浦上が燃えているのが見えた。

「うちはどうなっとやろか」。夜になってたどり着いた家は玄関が傾き、とても入れる状態ではない。「どうしよう」。その時、後ろから「豊じゃないか」と、母チヨさんの声があった。振り返ると、父と親戚もいる。チヨさんは顔全体にやけどを負い、葉草をはりつけていた。その日は家族や親

戚とともに、近くの防空壕で過ごした。

10日朝。子どもの頃の遊び場だった自宅前の浦上川に、多くの遺体が浮かんでいた。50人以上はいるように見えた。爆心地近くで被爆し、水を求めて川に飛び込んだまま亡くなった人たちが、満潮で水かさが増した時に下流に流されてきたのだろう。

中村さんは近くにあったわらの縄の先端に輪を作って川に投げ込み、3人の遺体の手や足に引っかけた。縄のもう片方の先は、電柱にくくった。「つないでいたら、誰かが火葬してくれるかもしれない」と思ったからだ。

「怖さは全然なかった。戦争というものが、そうさせたんじゃないですか」

その後、稲佐警察署に行き、遺体があることを報告した。くくった遺体は引き上げられたのか、数日後にはなくなっていた。

1945年8月15日。中村さんは防空壕の前で近所の人たちと一緒に、玉音放送が流れるラジオを囲んだ記憶がある。戦争が終わったことを知って、「良かった」と思う一方で、「これからまた学校に行き、勉強しないとイケないのか」という嫌な気持ちもあり、複雑だったという。

戦争が終わっても、周りには亡くなる人が多くいた。長崎市の竹の久保に住んでいた親戚のおじさんは、原爆が落とされた時、防空壕の中にいて無傷だった。直後に会った時には元気だったはずが、数日後に亡くなった。

中村さんの海星中の友達には、原爆で亡くなった人はさほど多くない。ほとんどが、中村さんと同じ川南工業香焼島造船所に動員されていたからだ。「亡くなったのは当日工場を休んでいた人」という。一方、爆心地から約500メートルの鎮西学院中に通う友達には、自宅で休んでいたために爆心地近くでの被爆を免れた人もいた。当日のちょっとした行動の違いが生死を分けたことになる。

中村さんは旧制海星中の3年生だった1944年に海軍飛行予科練習生に合格していたが、入隊することなく終戦を迎えた。戦況が悪化する中で、行き先が決まる度に予定が何度も変更されたからだ。

1945年4月、奈良にある海軍航空隊に入隊する予定が取りやめになり、7月には福岡の糸島にある海軍航空隊に入隊する予定もなくなった。9月から佐世保の海兵団に入隊することが決まった後、原爆に遭った。

中村さんは終戦の翌日、合格していた予科練について「どうすればよかとやろか」と思い、長崎市役所へ行った。市役所の職員は「もう行かんでいいよ」。自ら希望して試験を受けた予科練だったので複雑な気分だったが、今は「幸運だった」と思う。

「何で志願しなきゃいけなかったのか。原因は学校の教育ですよ」。戦争で将来が見えない。勉強すれば何かになれるという保証もない。そんななか、先生に勧められるがままに選んだ道だった。

終戦後に学校が再開するまでの間、中村さんは友達と一緒に動員されていた川南工業の香焼島造船所に時々遊びに行った。ある時、「捕虜たちが引き揚げられるらしい」と聞き、仲の良かったオランダ人捕虜がいる福岡俘虜収容所第2分所を訪ねた。

中に入って驚いた。捕虜の部屋にたくさんのチョコレートやお菓子、たばこがあった。8月15日の終戦後、外国の飛行機が収容所に、物資の入ったドラム缶を大量に落として行ったらしい。「もう自分たちは帰るから、持って行っていよいよ」と、捕虜たちに勧められた。中村さんたちは大喜びで、袋いっぱい詰り込み、担いで運んだ。港には、外国の病院船が捕虜たちを迎えに来ていた。

動員中は捕虜たちと一緒に作業するため、憲兵に怒られない程度に仲良くなる若者は多かったという。一方、階級の上の人たちの中には、捕虜を虐待していた人もいた。そうした人たちの家に、引き揚げる前の捕虜たちが荒らしに行ったといううわさもあったという。

戦後、旧制海星中では4年で卒業するか5年で卒業するかを選ぶことが出来たという。戦後すぐの1945年当時、4年生だった中村さんは、進級せずに年度末に卒業することを考えていた。好きではない授業を受け続けるのは気が進まなかったからだ。とはいえ、戦争が終わったばかりで、なかなか働き口も見つからなかった。

卒業を控えた冬。「5年まで残って野球しないか」。野球部の結成に向けて奮闘していた田川佐一先生から思わぬ誘いを受けた。

その時、戦争で中断された全国大会が1946年夏に復活することも決まっていた。田川先生はもともと柔道を中心に教えていたが、戦後すぐ、進駐軍から学校で武術を教えることが禁じられていたため、野球に情熱を注いでいたようだった。

進路が決まっていなかった中村さんは他の同級生2人とともに5年生まで学校に残ることに決めた。学校はあまり好きではなかったが、「それだけ野球が好きだった」。

中村さんは1946年春に旧制海星中の5年生に進級し、野球部の主将になった。当時は道具が十分になく、長崎県スポーツ史に「46年、各校にボール2ダースとバット2本程度が配給された」「ボールがなくてジャガイモでキャッチボールをした」との記述もある。

中村さんたちの練習に時々、進駐軍の米軍が加わってくることがあり、プレーした後、道具をくれた。グリップが長いバットが、今も中村さんの脳裏に焼き付いている。

ただ、米軍の野球は「力ばかり強くて、下手だった」。米軍のボールが中村さんの顔に当たり、歯が3本折れたことも。翌日、東南アジアから引き揚げてきた姉の夫が持ってきた土産を食べられなかったのが心残りだ。

当時、海星中は道具が比較的そろっていたといい、「他校の羨望（せんぼう）のま」とだったという。進駐軍の通訳

をしていた先輩が、捕手の装備一式など様々な道具をもらって来てくれていた。もらったレガースの色は明るかったのので、黒に塗り替えて使った。

復活した旧制海星中野球部の主将とエースを務めることになった中村さん。戦争が終わり、これから何をしていくか分からない「お先真つ暗」な時代だったが、野球部の再結成で「生きがい生まれた」。同窓会で仲間と会った時は、よく当時の話をした。

1946年7月、夏の全国大会に向けた県内の予選が始まった。ただ、焦土の長崎で、開催場所を探すのは簡単でない。試合でよく使った長崎市油木町の長崎商業学校（今の長崎商高）には進駐軍が滞在していたことなどから、現在、活水中学・高校が立つ場所にあった鎮西学院中のグラウンドになった。県スポーツ史によると、校舎が崩れフェンスもないグラウンドに、竹ざおを2本立てて間に網を張り、バックネットにしたという。

県内では12校が出場し、長崎と佐世保の両地区に分かれ、それぞれの代表が県代表をかけて戦った。中村さんたちは気合を入れて臨んだが、長崎地区での準決勝で、その年に優勝した旧制長崎中に負けてしまった。

戦後初めての夏の県大会で負け、悔しい思いをした中村さんら旧制海星中のメンバー。秋にある県秋季中学大会に向け、まだ入居していない復興住宅に寝泊まりしながら、長崎市浜口町にあった三菱球場に通った。今では、おなじみの「合宿」だ。「当時、海星が一番練習していたと思う」と振り返る。

合宿中、チームの腹ごしらえのために、野球部員の一人が「海藻まんじゅう」を大量に持って来ていた。食糧不足だった当時よく配給された、黒く、味のしないまんじゅうだ。その部員の実家は病院で、入院患者が残したものを持ってきたのだという。

合宿の成果か、秋の県大会では優勝。夏に負けた長崎中との決勝では前半にリードを許し、投手の中村さんはヤジを浴びたといい、「コンチクショと涙ぐんでた」。雪辱を果たして優勝し、ほっと胸をなで下ろした。

この勝利について、県スポーツ史には『「合宿すれば強くなる』と各校とも合宿を重視するようになったとか』とある。

「野球がなかったら、どうなつとったか分からん」。中村さんは戦後、進学先も就職先も、野球ができるかどうかで決めた。進むべき道を導いてくれるものだった。

一度、戦争で奪われた野球をする喜びは、その後の人生を豊かにした。特に大きな存在だったのは、一緒に練習に励んだ仲間たち。「戦時中は希望がなかった。野球のおかげでその後人間関係が豊かになって、人間らしさを作っていた」と振り返る。

7月6日の全国高校野球選手権記念長崎大会の開会式に出席し、雨のため屋根のあるスタンドからようすを見守つ

た中村さんの両脇には、海星の後輩で4学年下の小西勝(こにしまさる)さん(86)と5学年下の山田一美(やまだかずみ)さん(84)がいた。すでに亡くなった仲間も多いが、「僕の財産。死ぬまで付き合いが深い」と話す。

「100回の歴史は考えられないほど重い。こんな開会式、夢のまた夢だった」。ユニホームを着た57校の選手たちを見て、うらやましがこみ上げた。(田部愛・25歳)

ビキニ水爆実験 別漁船の元乗組員らが控訴

NHK2018年8月3日 16時40分



アメリカの水爆実験で日本の漁船が被爆した64年前の「ビキニ事件」に関連して、別の漁船の元乗組員などが国に賠償を求めた裁判で、訴えを退けられた元乗組員などが高松高等裁判所に控訴しました。

昭和29年にアメリカがビキニ環礁で行った水爆実験で静岡県の高知県の漁船の乗組員23人が被爆した「ビキニ事件」に関連して、当時、周辺で操業していた高知県などの漁船の元乗組員や遺族などは、国が調査記録を隠し、健康への影響を継続して調べなかったため自分たちの被害が明らかにならなかったなどとして、国に賠償を求めました。

高知地方裁判所は先月、1人を除いて被爆した事実を認めましたが、「損害賠償を請求できる期間を超えている」として、訴えを退ける判決を言い渡しました。

これに対して、元乗組員や遺族など29人が3日、1審の判決を不服として高松高等裁判所に控訴しました。

原告の1人、山下正寿さんは「元乗組員や遺族の多くが高齢で、原告の数は少なくなった。一刻も早い救済を求めたい」と話しています。

一方、国は「コメントは差し控える」としています。

沖縄で暗躍した「スパイ」 利用された少年部隊描く映画

朝日新聞デジタル保科龍朗 2018年8月3日 10時42分



沖縄戦で米軍の捕虜になった少年兵(「沖縄スパイ戦史」から)



太平洋戦争末期、地上戦が避けられなくなった沖縄にスパイ養成機関の陸軍中野学校出身者が多数、送りこまれていた。ジャーナリストの三上智恵さんと大矢英代(はなよ)さんが共同監督した「沖縄スパイ戦史」は、彼らが暗躍した、沖縄戦の「裏の戦争」の真相をえぐり出すドキュメンタリー映画だ。

陸軍中野学校を出たばかりの若き将校たちが沖縄の本島や離島へ配属されたのは、1944年9月以降。その数は42人にも上ることが、沖縄県名護市教育委員会市史編さん係の川満彰さんの調査で突きとめられている。

川満さんの著書『陸軍中野学校と沖縄戦』によると、彼らの任務は、来たるべき本土決戦を有利に戦うため、捨て石となる定め沖縄で、米軍の後方攪乱(かくらん)にあたることだったという。

映画は、そのために利用された少年ゲリラ部隊の消息をたどっている。

「護郷隊」と名づけられた部隊は、召集や志願を強制して約千人の10代半ばの少年をかき集めて急ごしらえされた。米軍の上陸後、戦車の爆破や敵陣への突撃を命じられ、生きのびた元隊員は「死んで親を悲しませるぐらいなら、生まれてこなければよかったと思った」と証言している。わざと米軍に降伏し、捕虜収容所に爆薬をしかける特殊任務も仕込まれていた。

160人が戦死した護郷隊は、地元民を「管理」するための手段でもあったと三上さんは語る。「我が子が死に物狂いで戦っているのに、米軍に投降する親はいません。乏しい食料も進んで供出する気になる。部隊と一心同体になるよう仕向けられたのです」

映画はさらに、戦火が及ばなかったのに島民の3分の1にあたる約500人が命を落とした、沖縄県南端の波照間

(はてるま)島の悲劇を検証する。マラリアが蔓延(まんえん)していた西表(いりおもて)島へ全島民が強制移住させられたために病死したのだが、その指揮をとったのも陸軍中野学校出身の将校だった。

その存在意義が国体護持にある限り、軍隊は、自国民を守るどころか手駒のように利用する。本土決戦でも、その戦闘方針は推し進められたらうと三上さんはみる。

大阪・十三の第七芸術劇場、京都市の京都シネマで4日から公開。(保科龍朗)

<「餓死」の島 戦争マラリアの悲劇> (上) 飢えと病の地獄があった

東京新聞 2018年8月5日 朝刊

「宮古ブルー」と呼ばれる美しい海に引かれ多くの観光客が訪れる。後方は無料で渡れる橋としては日本最長の伊良部大橋＝沖縄県宮古島市で(潟沼義樹撮影)



「宮古ブルー」と呼ばれる透き通る青い海とサンゴ礁に囲まれた沖縄県・宮古島は今、建設バブルの真っただ中にある。沖縄本島から南西に約二百九十キロ。宮古、伊良部、下地など六つの島からなる宮古島市は、さいたま市とほぼ同じ面積(約二百平方キロ)に約五万五千人が暮らす。あちこちで高級リゾートホテルやアパートの建設が進み、人手不足のため島外からも建設作業員が集まる。

宮古島と伊良部島とを海上でつなぐ全長三・五キロの伊良部大橋は三年前に開通し、絶景スポットとして人気を集める。大型クルーズ船の就航数は急増し、伊良部島に隣接する下地島(しもじしま)空港は来春、国際空港化される。二〇一五年度に約五十万人だった観光客数は本年度百万人を突破する勢いだ。

島中央部では、陸上自衛隊宮古島駐屯地(仮称)の隊舎などの工事も始まり、近い将来、警備部隊やミサイル部隊などが配備される。「島では軍隊と『カジノ』がやってくるとささやかれています」。駐屯地前で毎朝、抗議活動をしている上里清美さん(62)が皮肉交じりに語る。

急速に変貌する宮古島では、沖縄戦の記憶が風化しつつある。戦時中、そこには三万の日本兵がいた。旧平良(ひらら)市などで構成した「宮古市町村会」が戦後五十年の一九九五年に発刊した『太平洋戦争における宮古島戦没者

名簿』には、この島で戦没した約二千人の軍人・軍属の名前が都道府県別に記されている。その大半は、東京や神奈川、愛知など島外出身者だ。

沖縄本島のような地上戦がなかったにもかかわらず、島で一体、何が起きていたのか。島内の歌碑に、七十三年前の光景が刻まれていた。

「補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸(むくろ) 焼きし宮古(しま)よ八月は地獄」(編集委員・吉原康和)

高沢義人さんが詠んだ短歌を記した歌碑に手をつく宮古郷土史研究会顧問の仲宗根将二さん＝沖縄県宮古島市で



◆孤立、食料も薬も絶たれ

宮古島の中央に位置する野原岳(標高一〇メートル)には、海上自衛隊の宮古島分屯基地があり、南西空域を監視している。戦時中、ここには陸軍第二十八師団が司令部を構えていた。<補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸(むくろ) 焼きし宮古(しま)よ八月は地獄>。島の悲劇が刻まれた歌碑は野原岳の麓にある。

この短歌は一九八一年、朝日新聞に投稿され、高い評価を得た。作者は四四年秋から一年半、衛生兵として島に駐留した高沢義人さん(故人)だ。復員後、教員や千葉県松戸市議を務める傍ら、島での経験を詠み、歌集を出版。込められた反戦の思いに心を打たれた、歴史教育者協議会宮古支部の仲宗根将二(まさじ)さん(83)と交流が始まった。

高沢さんは仲宗根さん宛ての手紙に「毎日、飢えながら、栄養失調とマラリアで亡くなった兵士を茶毘(だび)に付していました」と当時の惨状を記し、「兵隊は現地で悪いことをしていたので、私はもう宮古島へは行きません」と伝えた。

「悪いこと」とは、住民の食料を盗み食いしていたことだという。仲宗根さんの説得で、高沢さんが島を訪れたのは終戦翌年に島を離れてから五十二年を経た九八年。歌碑は二〇〇五年に仲宗根さんら島の有志が建立した。

サンゴ礁が隆起してできた小さな島に四三年秋から日本兵約三万人が駐留し、海軍と陸軍の飛行場が三つ建設された。島は軍人と住民の雑居状態だった。

島で新聞を発行していた瀬名波栄さんが出版した「先島

群島作戦（宮古編）」では、戦病死した日本兵は二千五百六十九人とされ、九割はマラリアと栄養失調が原因としている。

「飢餓とマラリア感染による複合的要因」と軍人の死因を語る医師の伊志嶺亮さん＝沖縄県宮古島市で



沖縄戦が本格化した四五年四月以降に限っても、島で戦病死して靖国神社に合祀（ごうし）された軍人・軍属は九百人以上で、空襲や艦砲射撃などによる戦死者の三倍にのぼることが本紙の調査で判明している。

戦病死者が多かった理由を、島の医師、伊志嶺亮さん（85）は「疎開者を除き人口約四万人の島に三万の兵が来たのだから、食料不足が一番大きい。死因は飢餓とマラリア感染による複合的要因だ」と指摘する。

終戦直後に弟をマラリアで亡くした元沖縄県畜産会事務局長の久貝（くがい）徳三さん（84）は「自宅近くの陸軍病院前で、焼却場に運ばれる兵隊の遺体を毎日のように見た。兵隊たちが話す『マラリア』という言葉をよく耳にした」と語った。

仲宗根さんは歌碑を前に、当時軍が置かれた絶望的な状況を指摘した。

「制海権と制空権を米軍に奪われ、内地からの輸送は途絶えた。武器弾薬はおろか、食料も医薬品も届かない。マラリアに侵されても、医薬品がないから、百二十人の軍医を擁しても、なすすべもなかった」（編集委員・吉原康和）

<戦争マラリア> マラリアは熱帯から亜熱帯に分布する原虫感染症で、宮古島や八重山諸島などを含む先島諸島には戦前から存在した。沖縄戦が始まると、日本軍の命令でマラリアにかかる恐れの大い地域に強制疎開させられた住民の間で犠牲者が急増し、戦争マラリアと呼ばれた。



<「餓死」の島 戦争マラリアの悲劇> (中) 消えた集落 補償もなく

東京新聞 2018年8月6日 朝刊

終戦後、マラリアで廃墟と化した袖山集落の惨状を語る久貝義雄さん＝沖縄県宮古島市で



「戦争は終わったのに、毎日のようにマラリアで死んでいった...」

一九四三年秋、沖縄県・宮古島に海軍飛行場（現宮古空港）を建設するため、北へ約二・五キロ離れた袖山集落に強制移住させられた元小学校校長の久貝（くがい）義雄さん（87）は、マラリアまん延の恐ろしさを淡々と語った。

「葬式の連続。ここにいたら命が助からないと、四十戸余りあった集落の人たちは次々と逃げ出し、最後まで残ったのは私と兄だけでした」

地元の宮古タイムズ紙は四六年十一月に、袖山集落の惨状を伝えている。総戸数四十一戸、住民三百六十人のうち、マラリアに罹患（りかん）したのは三十九戸、三百五十人（97%）で、死亡者三十八人、夫婦死亡七組、一家全滅一戸（五人）...

かつて袖山集落があったとみられる宮古空港の北部＝沖縄県宮古島市で



久貝さんもマラリアに感染した。終戦で少年兵部隊「鉄血勤皇隊」を除隊となり、自宅に戻って間もない四五年十一月ごろ、突然ガタガタという震えに襲われた。高熱を発し、意識がもうろうとして約一カ月、生死をさまよった。

「耳元でかすかな声がし、はっと気づいた時に、枕元で母が泣いていました。私が治った後、その母も交代するように発病して一週間後に死に、父親も後を追うように死んだ」

袖山には井戸水も畑もなかった。住民は毎日、デコボコの山道を約二キロ下った隣の集落に水くみに行き、沖縄製糖工場の土地を借りてイモや粟（あわ）などを栽培して生活していた。

久貝さんは、マラリア大流行の要因を「水をくむのも、畑仕事をするのもマラリアの巣窟の湿地帯だった。そこで、住民が蚊にさされて猛烈な勢いでマラリアが広まったのではないかと推測する。



久貝さん兄弟がこの地を去り、袖山集落は廃村となった。袖山と同じように、海軍飛行場建設に伴って立ち退きを迫られた住民の強制移住先だった七原、富名腰（ふなこし）、腰原（こしばる）の三地区には、二〇一〇、一一年に公民館が建設された。各地の旧軍飛行場建設で立ち退きを迫られた地権者に対する戦後処理の一環だが、廃村となった旧袖山集落の人々の声は届かないままだ。

また、同じマラリアで死亡しても、軍人・軍属の遺族には国から遺族年金などが支給されていることを知る島民は少ない。

海軍飛行場建設で運命が暗転、厳しい戦後を生き抜いた久貝さんが言う。「好んで住み慣れた集落から出て行ったわ

けではない。マラリアの危険と隣り合わせの湿地帯での生活に追いやられ、軍人と同じようにマラリアで死亡しても、われわれには何の補償もない。今にして思えば、不公平だという気持ちでいっぱいです」（編集委員・吉原康和）

柳美里さん台本で高校生が演劇 9月上演に向け稽古に熱共同通信 2018/8/3 20:51



福島県立ふたば未来学園高で、柳美里さん（右）から指導を受ける演劇部員＝3日午後、福島県広野町

東日本大震災からの復興を担う人材育成を目指す福島県立ふたば未来学園高の演劇部が、同県に移住した作家柳美里さん（50）の台本で9月に劇を上演することになり、3日に柳さん指導の下、稽古に臨んだ。部員は「作者から直接教えてもらえ、自信がついた」と笑顔を見せた。

柳さんは東京電力福島第1原発事故で一時避難区域となった南相馬市小高区に書店を開いており、部長の森崎陽さん（16）が訪れたことがきっかけ。劇は柳さんが書いた戯曲を基に、被災した生徒たちの体験を反映させ、新たな内容にするという。

劇は9月、柳さんの自宅倉庫を舞台に上演する。

くつなぐ 戦後73年>元兵士ら証言と現代若者の手紙 学生ら英訳、来春電子書籍化へ

東京新聞 2018年8月4日 夕刊

パネルディスカッションで語る北川直実さん（左）や、早稲田大2年の上田直輝さん（左から2人目）ら＝6月、千葉市で



太平洋戦争の元兵士らの証言と、現代の若者が戦争体験者に宛てた手紙をまとめた書籍の英訳が進んでいる。来年三月の電子書籍化を目指しており、著者の一人で編集者北川直実さん（58）＝千葉県習志野市＝は「国境や世代を

超え、戦争の悲惨さや平和の尊さのメッセージを届けたい」と話している。(中山岳)

書籍は「若者から若者への手紙 1945←2015」(二〇一五年出版)。元兵士や東京大空襲の被害者ら十五人の証言と、証言を知った現代の十～二十代の十五人がつづった手紙が盛り込まれている。写真家落合由利子さん(54)、北川さん、ライター室田元美さん(58)の共著で、十年がかりの取材の成果だ。

戦争体験者のうち、長生郡東郷村(現千葉県茂原市)出身で一四年、九十歳で亡くなった篠塚良雄さんは、日中戦争下、旧満州(現中国東北部)のハルビンで、細菌兵器の研究開発を進めた「七三一部隊」の少年隊員だった。

篠塚さんは、捕虜らの人体実験に関わったことを悔やみ、「戦争は基本的に人命軽視。わたちは、(上官に)命ぜられればその通りに動くロボットにさせられた」と証言している。

「海外で読まれるよう翻訳したら」。読者から意見が寄せられ、北川さんらは昨年、英訳を決定。戦争体験者の証言の英訳はプロの翻訳家が担当し、若者の手紙は日本人、日系ペルー人、韓国人など多様な境遇の十～二十代の学生や社会人が手掛けることになった。

英訳に参加した早稲田大二年の上田直輝さん(19)は、篠塚さんの証言を読み「当時の若者は『国のためなら戦争は間違いではない』と教育を受けていた。戦争を知る努力を続け、自分の意見を持つことが必要だと思った」。津田塾大大学院二年の市村かほさん(24)も「戦争の教訓を学び、今の世代が生かす大切さを痛感している」と話す。

戦争体験者の証言などが収められた「若者から若者への手紙 1945←2015」



北川さんや上田さんらは、六月に千葉市で開かれた「平和のための戦争展」のパネルディスカッションで、英訳への思いや戦争体験者の記憶を次世代につなぐ大切さを語り合った。英訳に参加した若者らが、戦争体験者へ新たに手

紙を書く計画もあるという。

室田さんは「英訳を通じ、若者が戦争体験者の生き方に向き合ってほしい。今後も戦争について考え、世代や国境の垣根を越えて話し合ってもらえればいい」と話している。

北川さんらは電子書籍化の資金の寄付も募っている。問い合わせは、出版社「ころから」=電03(5939)7950、Eメール=office@korocolor.com=へ。

<つなぐ 戦後73年>原爆展 西城さん遺志継ぐ 「広島 島の悲惨さ 繰り返しては駄目」

東京新聞 2018年8月3日 夕刊

今年原爆展に掲示された西城さんへの追悼の言葉=川崎市宮前区で



広島市出身で五月に六十三歳で亡くなった歌手の西城秀樹さんは、二〇一〇年に始まった川崎市宮前区での原爆の悲惨さを伝える美術展に、初回から賛同人として名を連ねてきた。広島原爆の日の六日を前に、展示会実行委員長の田中光雄さん(73)=同区=は「悲劇を繰り返してはいけません」というヒデキのメッセージを後世に伝えようと、思いを新たにしている。(安田栄治)

「僕は原爆ドームを見て育った。あんな悲惨なことを繰り返しては駄目だ。でも原爆を体験し、悲惨さを伝えていく人が減っている。だから、あなたたちの原爆展は貴重。趣旨に賛成します」

三回目の開催を控えた一二年七月、西城さんはこう言って、賛同人を続けることを快諾したという。前年に二度目の脳梗塞を発症し、リハビリの最中だった。

原爆展では、市民有志の実行委が、原爆の脅威を物語る画家や造形作家の作品を公民館などに展示。西城さんは第一回が開かれた当時、区内に住んでおり、実行委のメンバーが自宅を訪問。賛同人を要請した。本人には会えなかったが、後日、引き受けるとの連絡が夫人からあった。

田中さんが本人に会ったのは一二年七月が初めてだった。「奥さまにお会いできればいいと思っていたが、本人が対応してくれた。脚にまひが残り、つえを使っていた。でも、舌がもつれたり、言葉が切れることはなかった。『リハビリは痛くて大変。でも絶対に治してカムバックする』と笑顔で話され、強い気持ちが伝わってきた」

三十分ほど話し「平和を願いながら歌い続けるのが、私が唯一できること」という言葉が印象的だった。西城さんは川崎から横浜に住まいを移し、原爆展は会場の都合などで毎年は開けなくても「気を使わなくていい。賛同人は続けるから」と告げたという。

五回目（一五年）と六回目（一七年）はメッセージも寄せた。今年五月、七回目となる賛同とメッセージを頼もうとしていた時、訃報を知った。七月の原爆展で追悼の言葉を掲示した。

田中さんは「脳梗塞を二度も発症したら、もうほかのことに関わるのはやめようと思ってもおかしくない。でも、西城さんは応援してくださった。それは私たちの誇り。永久賛同人と思い、原爆展を守っていきたい」と言葉に力を込めた。

◆「第五回宮前区平和のための原爆展へのメッセージ」

第五回宮前区平和のための原爆展の開催おめでとうございます。

私たちは、ヒロシマ・ナガサキの悲劇を二度と繰り返してはなりません。真の平和は、世界から核兵器を無くして初めて達成されるものと考えています。

そのためには、皆さんのこうした取り組みが大切です。広島出身の私は、心から核兵器の廃絶を願っています。

そしてこれからも、平和を願いながら歌い続けたいと思います。

原爆展の成功をお祈りいたします。

二〇一五年七月十日

西城秀樹

オウム事件 将来は資料館を 高橋シズエさんインタビュー

東京新聞 2018年8月4日 朝刊



一九九五年の地下鉄サリン事件で霞ヶ関駅助役だった夫の一正さん＝当時（50）＝を殺害された高橋シズエさん（71）＝写真、岩本旭人撮影＝が、本紙のインタビューに応じた。事件から教訓を学ぶために、「刑事裁判の記録や資料をいつでも、誰でも閲覧できるような資料館のようなものがつくれないかなとも考えています」と語った。（編集局次長・瀬口晴義）

麻原彰晃（しょうこう）元教団代表＝死刑執行時（63）、本名・松本智津夫（ちづお）＝らオウム真理教元幹部らの刑事裁判の記録などを永久に保存する法務省の方針が明らかになったことに「すごくよかった。必要だと思うことは繰り返し要請していくことが大事だなと思いました」と歓迎した。

地下鉄サリン事件被害者の会代表世話人の高橋さんは被害者参加制度で出廷した数も入れると、五百回以上、法廷で証言を聞き続けた。死刑執行で、真相が解明されずに終わったという指摘に対して「麻原は弟子のせいにして語りませんが、ほとんどの弟子はちゃんとしゃべっている。なぜ事件が起きたかという構造は、刑事裁判でほぼ明らかになったと思う」と指摘した。

毒物学の世界的権威である研究者が中川智正元死刑囚＝同（55）＝に面会し、サリン生成方法を聞き出すなど米国の関係者は新たなテロ防止に積極的に動いた。高橋さんは「日本の化学の専門家が死刑囚から話を聞き、テロ防止情報として他国に提供するぐらいやってもよかった」と述べ、テロ防止に対する日本の関係者の姿勢に疑問を呈した。

事件後、犯罪被害者の支援活動に奔走し、権利拡大に尽力した。一つ一つ壁に穴をあけてきた、という。「事件を通じて出会った多くの人たちから学び、新しい人生が始まっていると感じる」と語り、PTG（ポスト・トラウマティック・グロース）という心理学の新しい考え方に共感しているという。

<地下鉄サリン事件> 1995年3月20日午前8時ごろ、オウム真理教元代表の麻原彰晃元死刑囚らが共謀し、警視庁や中央官庁が集まる営団地下鉄（当時）霞ヶ関駅を通る3路線5車両で猛毒のサリンをまいた。乗客と駅助役の13人が死亡、6000人以上が重軽症を負った。国内では最悪の被害を出した無差別テロ事件。関与した教団幹部10人の死刑が執行され、4人の無期懲役が確定している。

遺族には風化なんてないのです 高橋シズエさんインタビュー詳細

東京新聞 2018年8月4日 朝刊

オウム裁判への思いを語る高橋シズエさん＝東京都千代田区内幸町で



—麻原彰晃元代表らオウム真理教元幹部の死刑囚の執行への立ち会いなどを遺族・被害者として要望し、今回は法務省から執行された死刑囚の氏名が遺族に連絡されました。

麻原の執行を聞いた時は当然と思いましたが同時に弟子の六人が執行されたと聞いた時は動悸（どうき）がしました。麻原は先に執行されると考えていて残りの人たちが一緒というのは考えていなかったから。

執行の立ち会いなどは二〇一二年から申し入れをしてきました。ずっと言い続けてきて受け止めてもらったんだと思いました。

一九九五年当時、遺族には裁判の傍聴席すら用意されず、私も抽選の列に並びました。遺影の持ち込みも裁判所に拒否されました。そこから始まったのです。

—教団の破産手続きでは、国や自治体より被害者の債権を優先させる法律が成立しました。国がオウム事件の被害者に給付金を支払う救済法も勝ち取りました。刑事裁判への被害者参加、犯罪被害者基本法の制定など、被害者の権利は広がりました。

犯罪被害者はいつも脇に追いやられていました。亡くなった主人が東大医学部法医学教室で司法解剖される時、待機していた私たちに連絡もなく遺体は葬儀会社に引き渡されてしまいました。東大医学部は遺族に配慮してパンフレットを作成し、待合室をつくるなど対応を改善しました。

私たちは一つ一つ壁に穴をあけていったのです。裁判員制度導入も麻原裁判の長期化がきっかけになっています。

—全員の死刑が執行されたことで、真相解明はできなくなった、という声も出ています。

オウムの公判は四百五十九回傍聴しました。被害者参加制度で出廷した数も入れると、五百回ぐらい法廷での証言を聞いています。麻原は弟子のせいにして語りませんでしたが、ほとんどの弟子はちゃんとしゃべっているんですよ。なぜ事件が起きたかという構造は、刑事裁判でほぼ明らかになったと思います。

「真実が語られないままだった」とか「どうして事件が起きたのか分からなくなってしまう」と言う人には、あなたはそのために何か努力されてきたんですか、と言いたいです。

毒物学の世界的権威である米コロラド州立大のアンソニー・トゥー名誉教授は東京拘置所の中川智正に何度も会ってサリン生成方法などを聞きました。政府が特別な許可を

出したのです。日本の化学者は「米国の学者だけ合わせるのか」となぜ怒らなかったのでしょうか。日本の専門家が死刑囚から話を聞いた結果を、テロ防止情報として他国に提供するぐらいやってもよかったはずです。

—記者会見では風化についての質問がありましたが、少し感情を出して答えていましたね。

遺族には風化なんてないのです。事件が風化していく責任を、どうして遺族が取らされなくてはならないのですか？ 型通りの質問だなどと思いました。被害者に向かって「風化」と言わないでほしい。風化の心配より、これから何を教訓にしていくのかを記者の皆さんには考えてほしい。

—犯罪被害者支援のために奔走されてきました。原点は地下鉄サリン事件当日、自宅に戻った時のメディアの取材攻勢でしたね。

夜、自宅マンションに戻り、エレベーターのドアが開くと、カメラのライトが一斉に向けられ、家には戻れませんでした。深夜、報道陣がいなくなったのを確認してやっと帰れたのです。連日のように夜中までメディアの人がずっといて、食べることも寝ることもできない状況でした。

メディアは生活を邪魔する存在でしかありませんでした。でも、犯罪被害者の置かれた立場について声を上げると、取り上げてくれたのもメディアでした。被害者報道を考える勉強会も新聞社の有志の皆さんと続けてきました。

被害者支援の活動では、二〇〇〇年冬の米国への三週間の研修が転機になりました。米国各地の犯罪被害者の遺族の会や支援組織を訪ねました。事件後すぐに被害者のもとに駆けつけるボランティアの支援活動に強い印象を受けました。事件後、被害者の家族に手渡される文書には、取材を受けない権利も明記されていました。

米国で出会った遺族は自身の心境を丸めて固めた紙に例えて説明しました。周囲の支えによって丸まった紙を元に広げていくことはできるんです。でもしわは残り続ける、と。被害者の心の傷はいつまでも残っているのです。

—麻原元死刑囚の一審の法廷では「憎しみや怒りを一生持ち続けて生きるのは、とてもエネルギーのいることで、オウムに殺されるのと同じことだ」と証言していましたね。

憎しみや怒りは半分ぐらいに減ったかもしれませんが。それは事件を通じて出会った多くの人たちから学び、新しい人生が始まっていると感じているからかもしれません。PTG（ポスト・トラウマティック・グロース）という心理学の新しい考え方に共感しています。二十三年という年月を経て、被害者として客観視できるようになりました。

—上川陽子法相がオウム裁判の記録を永久に保存し、将来は公文書館への移管も期待すると表明しました。

要請が聞き届けられてすごくよかったです。必要だと思うことは繰り返し訴えていくことが大事だなどと思いました。

9・11の跡地の地下につくられた米ニューヨークのメモリアル施設を訪ねた時、映像や写真などの資料に圧倒さ

れました。地下鉄サリン事件も刑事裁判の記録やいろいろな資料をいつでも、誰でも閲覧できるような資料館のようなものがつくれないかなとも考えています。

聞き手＝編集局次長・瀬口晴義

<PTG（ポスト・トラウマティック・グロース）> 日本語訳は「心的外傷後の成長」。戦争や犯罪に巻き込まれるなど、困難な危機と苦しみの中から、精神的な成長を遂げる人たちの体験とその過程。心理学の新しい考え方として注目されている。

オウム裁判記録、永久保存 異例の公表 法相「伝える責務」

東京新聞 2018年8月3日 夕刊

上川陽子法相は三日の閣議後の記者会見で、オウム真理教を巡る一連の事件の刑事裁判記録を「刑事参考記録」に指定し、原則永久に保存するよう指示したと発表した。教団元代表麻原彰晃（しょうこう）元死刑囚＝執行時（63）、本名・松本智津夫（ちづお）＝ら十三人の死刑執行に関する行政文書も期限を決めずに保存する。法務省はこれまで指定した事件名を明らかにしておらず、異例の対応。

上川氏は「過去に例を見ない、今後二度と起きてはならない事件。廃棄を避けて確実に保存し、将来の世代に受け継いでいくことも私の重要な責務だ」と話した。「いずれは国立公文書館への移管を期待したい」とも述べた。

一連の事件では百九十二人が起訴され、十三人の死刑を含む百九十人の有罪、二人の無罪が確定した。罰金刑となった事件の裁判記録など一部が既に廃棄されているが、残るほとんどは保存されているという。

調書など刑事裁判の記録は、判決確定後に検察が保管する。刑の内容や刑期に応じて定められた三～五十年（判決書は最大百年）を過ぎると廃棄されるが、犯罪や学術の研究などに有用だと判断された場合、法相が刑事参考記録に指定する。

一九八七年の法務省刑事局長通達によると、（1）死刑判決で終結した事件（2）国政を揺るがせた事件（3）犯罪史上顕著な事件（4）無罪判決で終結した事件のうち重要なもの一などを指定の基準としている。

今年七月末時点で七百二十二事件が指定されているが、法務省は事件名を公表していない。

<刑事参考記録> 刑事法制や犯罪に関する調査研究の重要な参考資料であると判断された刑事裁判の記録。刑事確定訴訟記録法や法務省の記録事務規程によると、検察庁の長が指定すべきだと判断した場合、法相に上申。法相が指定する。